

土 淨

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特）換承認雜誌第三五二号
昭和三十一年十一月二十五日 創刊 昭和三十一年十二月二日発行

第二十六卷

第十一号

十一月号



☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇円
送料八円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
尚編集の都合で大変遅れました事をおわび申
上げます。

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土十一・二月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

悪人正機説の法然に於ける

思想的源流

古田紹欽 (2)

成道

紀野一義 (14)

人情漸と除夜の鐘

吉田雅男 (28)

爪連の六夜様

鈴木成元 (7)

日の丸

(12)

身辺雑記

村田嘉久子 (20)

法然上人の感化

村上博了 (26)

新編 百喻経 (9)

伊東挙位 (32)

映画続「親鸞」を見て

内山憲尚 (18)

草木物語 (2)

合田微雪 (23)

扉の御法語

(30) 江戸時代の浄土宗 (6)

——童心仏心

(17) 日本靈異記より (22)

子供の怪我 (下)

村瀬秀雄 (33)

三十五年度目次一覧

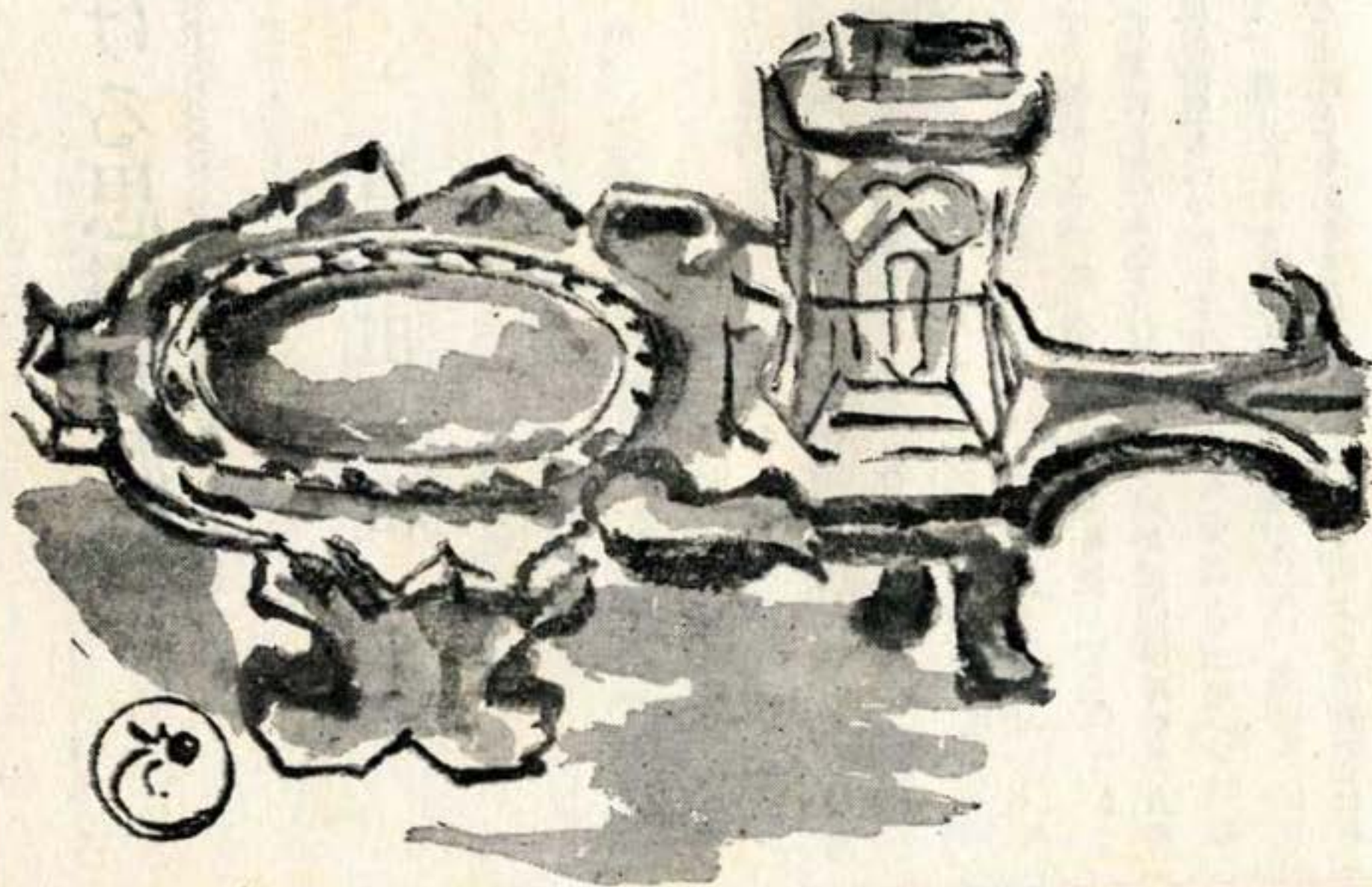
(37)

浄土

十一・二月号

往生をねがひ、極楽にまいらん事をまめやかにおもひ入たる人の気色は、世の中をひとくねり、恨たる色にて常にはある也。

法然上人御法語



悪人正機説の法然に於ける思想的源流



古 田 紹 欽

一

歎異鈔に「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と見えている一句は、親鸞の浄土教思想を端的に云い現しているものとして多くの人々が屢々耳にして親しんだ言葉であろう。この一句の思想は悪人こそ往生が必定であるとする所謂悪人正機の説であるが、こうした思想が親鸞に醸し出されるまでにその思想の由来するところが一体なかつたというのであろうか。

親鸞がどのように宗教的な天才的思想家であつたと云つても、親鸞のいだいた浄土教思想が自からのみの一人によつて形成されよう筈はなかつたのであり、そのことは親鸞の告白しているところによつても明かであると云わねばな

らないが、この悪人正機説の成立するに至つた由来を探索して見ることも意義のないことではなからう。

親鸞が思想的に自からのよるところを法然に求めたことは最早、疑義のさしはさまれる余地のない自明のことであるが、悪人正機説も由来するところが法然の思想にあることはその例外ではあり得ないのではなからうか。

「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という表現に全く類似して、善人と悪人とを転置して云っている法然の言葉に「罪人なをむまる、いかにいはんや善人をや」（黒田の聖人へつかわす御文）とあることが知られるが、善人、悪人に対する考え方の相違が法然、親鸞の間にあつたことはともかくとして、親鸞がこのような表現をも

つてするに至ったのには、必らずこの背後に法然の上述のように表現しているところのあったことを予想しないではいられないのである。

法然のこの思想は「黒田の聖人へつかわす御文」のような消息に見えているばかりでなく、「常に仰せられける御詞」として

「罪は十惡五逆の者、なをむまると信じて小罪をもをか
さじと思へし、罪人なをむまる、いかにいはんや善人を
や、行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべ
し、一念なをむまる、いかにいはんや多念をや」

と見えているのであり、恐らく法然の屢々繰返えして説いたものであったに相違ないのであり、事実またこうした思想は法然上人全集に収められている諸文献に散説されていることからそれが知られるのであるが、その説くところに親しく随侍した親鸞が影響されたであろうことは極めて自然なことであつたろうと思われるのである。

それでは「いはんや善人をや」という思想が「いはんや惡人をや」という思想に転じて行つたのは、親鸞と法然との間の思想的關係をどのように理解したらいいものなのであらうか。

法然が廢惡修善の自力行を斥けたことは今更云うまでもないことであり、「一百四十五条問答」に

「つねに惡をとどめ、善をつくるべき事をおもはへて念
仏申候はんと、ただ本願をたのむばかりて念仏を申候は
んといづれかよく候べき、

答、廢惡修善は諸仏の通戒なり、しかれども当世のわれ
らはみなそれにはそむきたる身なれば、ただひとへに別
意本願のむねをふかく信じて、名号をとなへさせ給はん
にすぎ候まじ、有智無智、持戒破戒をきはらず、阿弥陀
ほとけは來迎し給事にて候なり、御意之候へ」

と云っていることを窺えば最早、このことについて説明を要しないことではなからうか。今、此處で問題にしようとしている善人、惡人の善惡とは廢惡修善の善惡と言葉は同じでも異質的なことであり、廢惡修善の善惡についてはこれ以上に言及することを避け、法然が善人、惡人の善惡をどのように見たかをまず明かにすることにかかろう。

「十二箇条問答」に「男女貴賤をえらばず、善人惡人を
もわかつたず、至心に弥陀を念ずるにむまれずといふ事な
し」と述べているが、この思想は法然の思想に於て円熟し
たところの浄土教思想であり、弥陀の本願は善人惡人を差
別して往生の可否を定めるものではないとするのであり、

「悪人善人、愚人智人ひとしく念仏すれば往生す」（津戸三郎へつかわす御返事）ともあるように「ひとしい」往生を云っているものであり、善悪は等しい往生に於て区別される必要がないとしているのである。「弥陀の本願は機の善悪をいはず」（甘糟太郎忠綱に示す御詞）ともあるように善悪を論ずることを必要としなかったのである。

善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して（諸人勧化の御詞）差支えなかったのである。つまり本願他力の立場にあつては善悪の区別は無用であつたのであり、法然は善悪の無差別を唱えたのである。

このことは云い換えれば善人はさておいて悪人も捨てられないと云うことを意味するのであり、「悪人をすてられず、善人なんぞきはん」（登山状）と云うことになるのである、捨てられるべき筈の悪人救済を説くことになるのである、救済を悪人に対して強調して説くことに発展して云われざるを得ないことになるのである。

このことは弥陀の本願に見れば「仏は一切衆生をあはれみて、よきをもあしきをもわたし給へども、善人をみてはよろこび、悪人をみてはかなしみ給へる也」（念仏往生義）ということになるのであり、弥陀の慈悲は善人によりも悪人に対して向けられることになるのであり、本願は

悪人に対してこそあると云う結果にならざるを得ないのである。法然はこのことを「罪人なをむまる」と云つて、罪人の往生を保証し、まして善人をやと云う意味で「いはんや善人をや」と述べたものに違いないのである。

三

さてそこで問題は法然が善悪を差別することなく、悪人も本願の前には差別視されるものではないとしたことが、このままで悪人正機の説に展開するものをもっているかどうかと云うことである。

法然は「罪人なをむまる」として五逆重罪の人もまた往生することを説いたが、しかし造悪をすすめるのでは決してなかったのであり、このことは七箇条起請文を見ても明かなことであり、罪悪人の往生の可能は罪悪人を善人に優先して考えるということではもとよりなかったのである。

善、悪いづれに価値をおくかと云えば無論、善であつた筈であり、この点は法然は否定していないのである。造罪よりも造善こそすすめるものと云わなくてはならないのである。「罪人なをむまる、いかにいはんや善人をや」ということであるべきであり、どちらが往生に優先するかと云えば善人こそ優先するものと見るのが当然であつたのである。

しかし悪人の往生の保証は弥陀の本願こそがなし得るものであり、前述したように救済が悪人に向けられて強調されることにならざるを得ないのであり、弥陀は善人を見ては往生の可能を喜ぶことにおいて終ってよかったが、悪人については慈しきをもつて労り、救済の手を進んでさしのべねばならなかったのである。

弥陀の慈悲は少くとも悪人により多く加えられる必要があったのであり、このことからすれば悪人こそ往生の保証を得たものはなかったとも云えるのである。

法然が念仏往生義に弥陀は悪人をみてはかなしみ給えるものであると説いていることは極めて重大な思想であり、法然は弥陀の慈悲ということにあっては、往生はいかにいはんや悪人をやという思想をたしかにいだいたに相違ないのである。

「善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただむまれつきのままに念仏する人を、念仏にすけささぬとは申なり」と法然の云っている言葉は既にふれもしたように善人、悪人を無差別的に見たことであるが、この無差別視することの出来得るものの背後にはやはり悪人往生の強い弥陀の保証があることを見逃せないものであり、法然の善、悪を等視した思想には、親鸞のいうように「いはんや悪人をや」とまで表現されるものはなかったにしても、たしかに悪人をやと云われるものが内在したのである。

黒谷源空上人伝を見ると「浄土の一門は解し易く行じ易ければ、得脱最速なり、愚鈍下智を捨ざれば庸学なを勇あり、破戒重罪を簡ざれば、悪人なを生る」とあるが、二つには悪人をやの思想がたしかに述べられもしているものであり、この伝を記したという聖覚は法然にこのような思想の存したことを卒直に或は書きあらわしたのではないかと想像されるのであり、この法然の思想は偏依法然の立場を取った親鸞だけに一層受けつがれるものがあつたのではないかと推測されるのであり、それがついに親鸞に於ける悪人をやの悪人正機説にはつきりと展開するに至つたのではないからうか。

悪人正機の説は決して親鸞に於て突如と現われた思想ではないのであり、親鸞がこのような表現をもつてした思想の根底は法然にあることを疑わないのであり、法然の説いている、いはんや善人をやの思想は実は悪人をやの思想に法然自身のうちにあつても、つながっているものであることを疑わないのである。

歎異鈔にある「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人

をや」の思想が法然の思想から隔絶して見られようとする考えがともすれば行われていることを思うとき、親鸞によつてこの思想が明確になったことが云われることは云うまでもないとしても、その思想の由来するところの存することも見失うことなく、これまた存することの云われるべきであると云いたいのである。

最後に念仏往生要義抄に「念仏のちからにあらずば、善

人なをむまれがたし、いはんや悪人をや」とある表現を、念仏のちからによれば善人なを生れると読むとき、いはんや悪人をやの思想が、歎異抄の表現と全く類似してくることを一言だけして、いまはこの稿をこれにとどめておくことにしよう。

(東北大学教授)

江戸時代の浄土宗

江戸時代の寺院の状態をみると浄土宗が最優勢で、京都では寛文五年には十万人を計算し、十年後の延宝二年には十四万人を数えた。従つて寺院も浄土宗が断然優勢であつた。更に各宗の信仰を諸藩大名の実状からみると、二百六十六藩あつたうちで、禅宗関係が一番多く、各派を合すると百六十五という絶対数を占めていた。ついで浄土宗が六十五、天台が十九、法華が十一、一向宗が四、真言宗が二であつた。これによつて武士大名の菩提寺の性格を知ることができる。

寺院の総数からみると、嘉永七年の諸国

分限府によると、寺院が四四八六〇〇カ寺

あつた由で、浄土宗が十五万カ寺、禅宗八

万カ寺、東西本願寺が十二万カ寺あり、新

義真言は一万余カ寺であつた。

江戸時代に寺院が一面に増加したが、他

面廃寺も頻りに行われた様である。然しこ

の記録は比較的少ないのは何故であらうか

説明することができない。本末録には潰地

とか潰寺という名のもとに記入せられてい

るが、その年月は多く詳でない。中にはす

でに廃寺同様でも未届け状態になっていた

ものもあり得るようである。廃寺と合併寺

とは自ら異なるも実体においては其の寺院は

本末録より寺名を失つた以上廃寺としてみ

るべきであらう。明治以前には潰寺という

記録は極めて稀で、明治に至つて廃寺の届

と、其の年月が多く記せられている。しか

し大半は其の年月を全く記入せず「廃寺」も

しくは「廃」の一字を頭に朱書しているのに

止まる。従つて其の歳月を知ることができ

ない。ただこの内に記入せられたものから

年時を観察すると明治五年より十年に互つ

て廃寺が正式に行われた点は認めてよいの

である。(櫛田良洪博士「本末録に見ゆる

新義真言宗寺院」より

瓜連うりづらの六夜ろくや様さま

— 聖問の遺蹟を訪ねて —

鈴木成元



聖問禪師像 西山如拙氏作

の新鮮な空気が頬をなで、増々目は冴えるばかりであった。都内では絶対に味わえないスピード感と、汽車では味わうことのない新鮮な空気が頬をなで、増々目は冴えるばかりであった。都内では絶対に味わえないスピード感と、汽車では味わうことのない

対に味わえないスピード感と、汽車では味わうことのない新鮮な空気が頬をなで、増々目は冴えるばかりであった。都内では絶対に味わえないスピード感と、汽車では味わうことのない

九月十七、朝霧あさぎりの立つ東京を六時に出発し、新らしく補装の成った弾丸道路を一路水戸へ向かった。珍らしい早起きの寝不足を車内で補おぎななおうと乗った車ではあったが、半開きにした車窓からはオゾンを一杯含んだ田舎

出来な見馴れぬ風景に氣をとられている間に、いつしか二時間半の時間が過ぎ、観梅で名高い水戸公園の坂を登って水戸市内に入った。小高い丘陵の上にある水戸市街は実にのんびりとしており、単線運輸の市電も、楽し

みなながら走っている様子であった。モレル言葉で親切に教えてくれる水戸の人々に何回も道を尋ね、目的地の瓜連うりづらについたのは九時には少し早かった。

関東の名刹常福寺は、延元年中（一三三六）了実りようじつが開創し、太田城主佐竹義做の祈願所であった。その後弟子の聖問しやうもんが法灯をついたが、嘉慶二年（一三八八）民家の失火で全焼し、今の地に移して応永二十年（一四一三）頃に完成したらしい。そして聖問は応永二十二年には弟子の了智に譲って小石川の伝通院に移るのである。その後増々充実し、宝徳四年

(一四五二)には勅願所となり、天文十二年(一五四三)には「常福寺」の勅額をもらい、慶長七年(一六〇二)には御朱印をもらうという有様で、関東十八檀林の上席として勢力を保持したのである。とくに水戸、徳川両氏の関係は格別で、光圀が自分で世話をして住持代々の常業衣の繪旨をもらってくれたほどで、江戸時代以後になると、じっと勉強さえしていれば生活に不自由はないという恵まれた寺であった。

このような状態にあった常福寺も、今はかえって水戸学のために苦勞をしている。水戸藩では何も寺をつぶそうとして水戸学を行ったのではなく、むしろ水戸藩は百五十石の朱印を与えて常福寺を保護したのである。つまり常福寺は水戸藩のおかえ寺であった。けれども長い間培^{つちか}われた水戸学の影響は庶民の間に深い根をとどめている。一昨年、久慈川の橋梁完成式当日、祝に打ち上げた不発の花火ではば全焼した常福寺は、八百軒の檀家を持ちながらも、今日までその復興には並々ならぬ努力を払っている状態である。これは何も常福寺ばかりではない。足利尊氏の例

をみても明らかである。尊氏が仏教に関心があったことは安国寺の例をみても明らかである。しかし彼の行った政策の半済^{はんせい}は、結局は寺院經濟を窮地に追い込んで行ったのである。これが発展して行く歴史の真の姿であり、必然性でもある。

うっそうと繁った杉並木の中央に、大きな体を持てあましたような山門と、形のよい鐘楼だけがわずかに江戸の香りを残しているだけで、他は全く焼滅した姿は、何と表現したらよいか形容の方法もない。焼け址というものは寺ばかりでなく何処でも寂しいものに相違ない。しかしこの寺の移り変りを生半か記憶しているだけに、一層私には寂しさを増したのかもしれない。

夏草やつわものどもが夢のあと

と詠んだ芭蕉の句と、時間と場所の相違こそあれ一脈相い通ずるものがあるであろう。いやむしろ、平泉の毛越寺^{もつせじ}址よりも、私には胸に迫るものがあつた。そして草むらの中に点在する大きな土台石は静かにそれを語ってくれるようであつた。

寺が焼失して残念なことはこの上もない

が、せめてもの慰めは、「拾遺古徳伝」と、「古文書」類が残ったことである。「古徳伝」はいうまでもなく法然上人の絵巻物であるが、もとは上宮寺(真宗)にあつたもので、勅伝とは趣を異にしているが、法然上人研究に大切なものであり、早くから貴重な存在となっていた。しかし文書の方はあまり知られず、使用もされていなかったが、これも「古徳伝」同様重要なものである。今から五百五十年も前の、聖岡の真筆が現に残っているのである。しかもこの文書は聖岡が小石川に行く年(応永二十二年)、了智に与えた讓状である。また日本歴史学上でも注意を要する事件を記した「菩薩戒儀」(聖岡筆)も今に存しているのである。

これらの文書や記録を五百年後の我々が、同じ場所で現に手に取ってみることが出来た喜びは格別であつた。しかも二間^{ふたまた}しかない急造りの仮り部屋で、広大な境内の中に、小さな仮り本堂を眺めながら、藪蚊にさされて見る古文書の感じは全く感無量であり、嘉慶の火事で全焼にあつた聖岡の心境もくみとれる感じがしないでもなかった。それはともか

く、その他、常福寺には檀林関係の古文書が多数残っている。これなくては浄土宗史は全くわからなくなるであろう。このように貴重なものに現に残存することは、本当に不幸中の幸であつたといわなければならない。

瓜連周辺の人々は仏教に対する関心が非常に薄い。しかし神道に対する関心は格別で、

譲渡

瓜連寺地常福寺別當

石當寺有淨喜御寄進地先師

了實開山砌也然今は房舎子

の智房も廢也 守先規下致

御祈禱精誠と云ふ事上進

公入藏と云ふ可令相懇子

聖紀房仍副二付、其狀の件

應永廿二年 八月廿二日

狀 讓 筆 實 問 聖

お寺に来てポン・ポン拍手を打ってお詣りをする有様である。それはそれでもよいが、めったに寺に来ないところであり、彼岸でもお盆でも、他所の寺院のように多忙ではないようである。これは水戸学の影響によることは勿論であるが、それ以前にもそう信仰のある土地とは思われない。だからこそ聖問も庶民の布教には熱を入れたのであろうし、

あれだけ多くの著書を書いたのである。実際に聖問は学問もし、頭の切れる

のも無類ではあつたが、やはり彼の環境がそうさせたものであろうということも忘れることが出来ない。何にしても彼の行蹟からみて、浄土宗の中興であることは、誰がみても異論のないところである。

それはともかく、常福寺はこのような寺ではあるが、忘れてはならない行事がある。それは「三十六夜様」といって、九月二十六日の晩に行われるお祭りである。これは単に「六夜様」ともいわれ、年に一度の最大の行事であることはいうまでもない。これはいうまでもなく聖問

を祭つたものである。聖問は応永二十二年に江戸小石川の伝通院で入寂するのである。しかし土地の人々は瓜連で入寂したと伝え、その祭りを行うのである。つまり瓜連の人々は弥陀は信じないが、弥陀思想を力説した聖問は神とあがめられ、盛大に祭られるのである。これはちっと常識では考えられないことである。しかし、事実なのである。この事実をみても聖問の人格がどんなであつたかは恐らく想像がつくことであらう。

聖問は暦応四年（一三四一）佐竹の一族である久慈郡岩瀬城主の子として生れた。しかし貞和元年（一三五四）五才の時父が流れ矢で死に、城は奪われ、母とともに山に隠れたが、同四年に常福寺の了実のもとで得度し聖問と名のつたというのである。この岩瀬城址は今は田圃の中で、常福寺十八世の相関代に寺を建て、今に誕生の時に使った井戸が境内の端に「誕生井戸」として残っている。しかし城址といつてもいわゆる豪壮な構の石垣があるわけではなく、豪族の館の址だったのであろう。つまり聖問の父は岩瀬の豪族であつたに相違ない。

至徳二年（一三八五）了実の後をうけ常福寺の住持となった聖罔は、応永二十二年までの二十年間、寺の復興は勿論、道俗貴賤の教化に努めたのであるが、決して安穩な日が続いたわけではなかった。この地方は始終戦争があった。とりわけ応永三年（一三九六）には佐竹氏の乱があり、郡内の人々は四方に逃げて戦をさけた。聖罔もこの時五軒弱離れた阿弥陀山の巖穴に身を隠したという。この巖穴は直牒洞じきてつあなとよばれて今に残っている。すなわち聖罔は少しばかりの乾柿をもって餓うえをしのぎ、巖穴の滴を硯に受けて直牒十帖を書いたというのである。全く驚いたファイトであり、それでこそあれだけのものが書けたのだとつくづく考えさせられた。

この巖穴の広さは四平方メートルぐらいであるが、正面に不軽菩薩の像が浮き彫りしてある。伝説によると、白い亀が背中に鏡をつけて聖罔に献じたので、聖罔はその鏡で自分の姿を写し、岩に像を彫ったというのである。土地の人はこれを不軽菩薩と呼び（阿弥陀山は一名不軽山ともいうのでこう呼ぶのであろう。そしてこの浮き彫り像を不軽薩菩と

いうのは後世であり、その当時は、巖穴に蟄居していた聖罔をそう呼んでいたのである。それにしても聖罔はこの巖穴に入ったきりであまり表に出なかったらしい。そこで「みかづき」上人というニックネームまでも出て来るのであろう。）、いくらけづつても消えないといって不思議がっている。それはそれとしてもこの像は不軽菩薩、すなわち聖罔であり、六夜様同様尊敬されのは当然といわなければならぬ。この地には常福寺三世の了智が師恩に報いるために香仙寺という寺を建立し今に至っている。



直牒洞 正面

巖穴の前にある椎の大樹はその当時のものであろうか。恐らくそうであろう。そうすれば、この椎の実も蟄居に苦しむ聖罔の餓をも済ったに相違ない。美しい黄金の稲穂がゆらく谷地に、老いた体を静かに横たえながら、あたかもこの巖穴を隠しているようでもあり、また、ここにあるぞと教えているようでもある。ここは松栄まつざかという地名のごとく、松におおわれた山々にかこまれ、水は豊富で気候はよく、全く蟄居するにふさわしいところである。この土地生れの聖罔であるだけに、前から知っていたのであろう。一般の人々に聖罔といったところではわかる人は少ないであろう。しかし小石川の伝通院を開いた人とか、芝の増上寺を開いた聖聰のお師匠さんといえは、成程とうなづく人も多いことであろう。浄土宗を中興した聖罔であるのに何故このような状態なのであろうか。聖罔と全く同じ状態にある真宗の蓮如などと比較すると、一沫の寂しさがある。

時間が経てば記憶が薄れるのは当然のことであり、世間もまた移り変わるのに相違ない。しかしだからといって無理に忘れる必要もな

いであろう。伝説は史実ではありえない。しかし伝説は伝説としてその中に捨て去ることの出来ない何物かを含んでいるのである。仏教的な行事を全く軽んずる瓜連地方において、聖岡が種々な形で伝説化され、しかも神として実際に祭られ尊敬されているのを見る時、宗門人の我々としては、もう一度考えてみる必要はないであろうか。新宗教乱立の当社会において、仏教はその無能・無力を痛いほど批難されている。しかしそれは教義に対するものではない。その多くは僧侶の日常生活や、檀信徒に対する力の不足をいっているのである。教義の顕揚も大切に相違ない。しかし、だからといってその教義を弘めることを忘れることは出来ない。方法なくしては何事も成就しないからである。こう考えて来ると、聖岡の足跡が一段と印象づけられるのである。

奈良の仏教、平安の仏教、鎌倉の仏教、江戸の仏教と考えてみると、それぞれに大きな特色を残して移り変って来たことは事実である。そして現在の仏教といえども必ず移り変るに相違ない。そういう意味からいえば、



洞内 不輕菩薩院像安置点より表を見る

常福寺の焼失もいづれはたどらなければならぬ運命に相違ない。そして事実三回の火災にあいつつも、現在まで法灯は続いて来たのである。けれども中世の古文書や貴重な記録を焼失すれば、二度ともどって来ないのである。成程、新らしく建つ寺院も昔の寺とは随

分と異なるであろう。昔日の面影をいつまでも残したい気持は十分にあるが、常福寺の建築そのものは江戸時代のものであり、古文書は創立当時の室町時代のものである。幸いに度々重なる災難を乗り越えて今日まで無事に古文書類を保存出来たことは誠によろこびにた

えない。ましてこの古文書は、今まで使用されていなくても、そして貴重なだけに、その喜びは一層である。しかしこのままではいつまたどんな災難があるとも限らない。何とかもっと安全な形で後々の世まで持ち続けたいと考えるのは、一人私ばかりではないであろう。勿論これは浄土宗の宝であるとともに、日本の学会を左右する大切な宝であると信ずるからでもある。

法然上人七百五十年御忌を来春に迎えて、各地で種々なる行事が展開されていることは誠に喜ばしいことである。しかしふり返って考えると、現在こうして御忌を迎えることが出来るのも、聖岡あったことであり、喜びを迎える反面、ちーんと脳裏に焼け址が想い出されてならない。夕暗に消えゆく梵鐘にはしたくないものである。

(一九六〇・九・二四)

×

×

×

×

日の丸

— 文化のこと —



☆日の丸☆

ローマ・オリンピックも終り、選手団も帰国してほっと一段落。ついて四年後の東京大会には今度こそ〇〇本の「日の丸」を挙げんと掛け声は勇ましい。「オリンピックは参加することに意義がある。」とはまさに名言で、日本選手団の不成績もずいぶんカバーされた。それにしてもマス・コミの騒ぎかたもひどいもので、実力以上に期待された選手はそれこそお気の毒で、有難迷惑というもの。プロ野球の選手や相模力士の人気者がマスコミのいたずらで没落して再起不能になった例

もあるとのこと。一層の自重を促したい。ローマでは予選にも通らなかった選手もあるとか、国民の尊い募金を使っているのですから、せめて四年後には名誉挽回して活躍して欲しいものです。

「参加することに意義がある。」とは至極ごもっともですが、やはり「君が代」の国歌吹奏で挙がる「日の丸」をみるのは良い気持、目がしらがジーンと熱くなってくるのが人情というものです。矢張り、「日の丸」は日本人のふるさと、日本国家を表象する尊厳なシンボルです。古くは、アロー号事件が原因で起されたというアヘン戦争も国旗屈辱が理由であったということですし、最近でも、数年前、日本で開催された中国見本市で一日本人が中国の国旗をひきおろした事件が、中国側に謝罪するといった大問題が起ったり、沖縄のデモで、アメリカ兵がデモ隊のもっていた「日の丸」を奪って問題になったなどと、如何に国旗が重要な国家のシンボルであるかを物語っています。

最近、国連に新興アリフカ独立国が大挙加盟して、黒いブームをまき起していますが、新興国が国旗を制定する場合は、新憲法で規定するのが慣例となっています。日本の場合は、他の伝統ある独立国と同じ様に憲法その他で別段の規定はありませんが、一八七〇年（明治三年）一月二十七日の太政官布告によ商船旗の規定に従うのが慣例となつています。2:3の長方形の旗面の中心に、タテの3/5を直径とする円を描くものとされていますが、7:11の長方形の旗面の中心から風土（旗竿よりのこと）にタテの1/5よせた点を中心にして、タテの直径とする円を描くという規定説もあります。

世界の国旗をみますと、大部分は白を含めて二色ないし三色で、屋外に掲揚される場合に、鮮やかに認識される様に赤・藍・黄が多く用いられています。もちろん同じ赤系統の色でも朱紅、あぶき色などとその国の民族の伝統色がありますので変わっています。デザインをみてみますと、日章旗は「白地に赤く日の丸染めて」と太陽をかたどったものです。同じ太陽をかたどったものとしては中華民国

の「青天白日旗」があり、フィリピン、アルゼンチンも同様です。月をかたどったものとしてはトルコ、エジプト、パキスタンがあり、天体をかたどったものは割合に多いようです。その他、国の紋章を入れたり、建国の由来を描いたものや、デンマークのように十字架を描いた宗教的なものもあります。

この様に国旗はそれぞれ国家を表象する重要なシンボルで、特に日章旗は太陽が東天高くあがらんとする意気のさかんな立派なシンボルで、世界に誇るすばらしい国旗です。日の丸は日本のシンボル、これからも、もっと大切にしていきたいものです。文化の日にはこぞって日の丸の旗を！

☆文化の日☆

十一月三日は文化の日。旧明治節と同じですが、一九四六年（昭和二十年）この日に公布された新憲法の戦争放棄宣言を記念して昭和二十三年に制定されたもので、この日は国をあげて平和を喜び、文化をすすめる祝日です。この日には科学・文芸・絵画・彫刻・建築・音楽などの部門で勲績卓絶な人に文化勲章が授与され、その他芸術祭などの行事がこ

の日を中心に行われます。

ところで「文化」という言葉は「新辞鑑」によると、(一)世の中が開け進むこと、(二)威力や刑罰を用いずに文徳でみちびき教えることあります。しかしよく考えてみると、「文化」という言葉は整理が出来ない程、複雑多岐に使われています。明治時代には「文明開化」の意味が、大正時代になると幾分「舶来趣味の新しがり生活」という意味が加わり、これが第二次大戦後は急に「文化国家」の呼び声が高くなるにつれ、「文化財」の保護から人間国宝の誕生をみ、「文化功労者」には年金の支給、「文化の日」には「文化勲章」が「文化人」に贈られるといった具合です。ところが「文化的進歩人」という奇妙な名称から「〇〇文化学院」といった学校の名称から、「文化部」、「文化サークル」の「文化活動」が学校などで盛んになり、果ては一般家庭品の中にも「文化鍋」「文化バケツ」ともなり、「文化センベ」、「文化マンジュー」という食品から「パチンコ文化」となる「文化」もどうやら墮落したようです。

このような「文化」の言葉の日常語に至る

までの鑑用は日本文化の特性とも云えるようですが、学問の世界でもはっきりした概念の規定はないようです。ドイツでは文化といえは、おおむね精神的諸産を意味して、文明を物質的諸産として区別しているようです。イギリスやアメリカでは、「文化」を「文明」とを含めた広い意味に使われています。日本では精神文化、物質文明と一応の区別はしているものの、むしろ主として、学問芸術の世界やそういった教養をさして文化と呼んでいるようです。

文化の日だから、パチンコ文化で今日一日を過ごそうかななどとはいわないで、今日一日でもよいからすぐれた日本文化の果実を味ってみたいものです。

「禁断の木の実」とはいわずに、大いに文化を楽しみたいものです。

(愛知正直)

×

×

×

×

成道

——おさとりの日——



紀野一義

禪宗の六祖に、慧能（えのう）という方がおられました。南中国の片田舎に生まれ、薪を売り歩いてようやくその日を送っていたというのですが、ある日、広東（かんとん）の町の大通りをいつものように、薪はいらんかと売り歩いていると、突然、一軒の家の中から、歌うように美しい旋律で経を誦する声が聞こえました。その声がかれの胸の奥底までひびくように思われて、かれは垣根にしがみついて、ガタガタふるえながらその経を聞き、おわるとす

ぐにその家の中に入って行って、その経の名を訊ね、誰に教わったときいたのです。経の名は金剛般若経、教えた僧は五祖弘忍（こうにん）であると、すぐに知れました。この薪売りはやがて弘忍の弟子となりました。最初は、田舎からポット出の無学な百姓のこととて、毎日米つきばかりやらせられていたといえます。ところがある時、弘忍門下の俊才である神秀の書いた詩を鼻で笑って自分の詩をその横に貼りつけまし

た。いや、正確に言うと、自分の詩を他の僧に書いてもらい、貼りつけてもらったのです。その詩が文句なしに立派なものだったので、誰の詩だ、誰が作ったのだ、と大騒ぎになり、あの米つきの能なし男が作ったと知れていよいよ騒ぎが大きくなりました。その夜遅く、師匠の弘忍は慧能を呼んで、ひそかに法を伝え、逃がしてやったということでもあります。この六祖慧能、自分では経典も読めず、字も書けません。知ら

ないのです。それで、法華経や華嚴経のこ
とを問う者があると、「わしには読めんか
らお前読め」と言つて読ましておいて、そ
の意味をちゃんと教えてやれたというから
えらいものです。この人の言行をまとめた
ものに「六祖法寶檀經」という書物があり
ますが、その一節にこういう意味のことが
書いてあります。

友よ、わたしは弘忍和尚のところで、
一度きいて言下に悟り、仏の何たるかが
分つた。般若の智慧の光が意識の根底に
まで達すると、その光はひろく内外を照
らし、人は自己自身の内奥の心を知るよ
うになる。内奥の心を知ることが解脱で
ある。すでに解脱を得ると、般若三昧を
得たことになる。般若三昧とは、無念と
いうことである。無念とは何かという
と、無念とは一切のものをあるがままに
見て、しかもなにものにも執着しないこ
とである。一切のところにも身を現すが、
しかもどこにも執着することのないこと

である。もしも何も考えず、念うことを
断ち切るのが無念だなどと考えたとすれ
ば、それは法に縛られているのである。
それは辺見というものである。

分り易く申しますと、「悟りというの
は、とらわれないということだ、別な言
葉で言えば、無念ということだ。じゃ無念
とは何かというと、一切のものをありのま
まに見て、しかもどこにも心を囚われない
ことだ。どこにでも現れるが、どこにも囚
われることがないということだ。悟ったら
何も考えないなどと考えるのは、もうすで
に囚われていることだし、間違つた、行き
すぎた考え方なのだ。」ということになり
ましようか。紀元前四二八年に、釈尊の成
道があつたわけですが、その成道の内容も
やはりこの通りではなかったかと、わたし
は考えます。釈尊は、一切のものをありの
ままに見てどこにも心を囚われないような
境地に、成道の瞬間から入られたのであろ
うと考えます。

増支部經典の中の「等覺品」という章
に、

わたしはこのように、世間のとらわれ
をとらわれとし、わざわいをわざわい
とし、出離を出離として、ありのままに
覺つたから、初めて、わたしは、かれら
の中で、この上もない正しい覺りを得た
と名乗つたのだ。また、わたしに、智慧
と正見とが生じたのだ。わたしの心の解
脱は不動である。

とあります。わたしは、成道とか、覺りと
か、いろいろに言うけれども、そのきわま
るところはここにあると思うのです。「と
らわれをとらわれとして」という言葉の意
味は、「とらわれて、とらわれず」という
ところにあるような気がします。

金剛般若經の中に、「まさに住する所無
くして、しかもその心を生ずべし」（応無
所住而生其心）と漢訳されている一句の原
文を、現代語に訳す時に、わたしは、

求道者すぐれた人々は、とらわれない心をおこさなければならぬ。何ものかとらわれた心をおこしてはならない。

と訳しましたが、その註には、「愛して愛にとらわれず、憎んで憎しみにとらわれない境地をいう」と記して置きました。わたしの氣持をもう少う申し上げさせて頂くと、

愛することも、憎むことも、人間の本能であつて、憎いと思う者を愛するようになると言つてもそれは無理ではないかと思うのです。愛さなければと思いつつも憎しみを覚えてしまうところに、凡夫の悲しさがあると思うのです。それではどうしたら良いか、愛しいとも、憎いとも思わぬ眼を片方に持つことなら、わたしたちにも出来るのではないのでしょうか。憎らしいと思うのなら仕方がない、憎らしいと思つてもよいけれど、その一方では、憎くもなんともない、ひとりの人間がそこにいるといった

淡々とした態度でその人を見るといふこと。それが、憎んで憎まずの境地ではないか、そして、その淡々とした一方が大きくなつて行けば、釈尊の、そして、六祖のさとりにも近付いて行けるのではないだろうかと思ふのです。そして、その境地が、法然上人の言われた、

「法爾道理ほうにどうりといふことあり。ほのほはそらにのぼり、水はくだりさまにながる。菓子の中にすき物あり、あまき物あり。これはみな法爾道理なり——。ただ一向に念仏だにも申せば、仏の來迎は、法爾道理にてそなはるべきなり。」

という世界や、

「現世をすぐべきようは、念仏の申されんようにすべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてて、これをとどむべし。」

と言われた世界や、あるいはまた、高野の明遍僧都みへんそうどうとのやりとりのあと、ずいと体を押し出すように言われた、

「ただ詮ずるところ、おほらかに念仏を申し候が第一のことにて候なり。」

という言葉に、ぴしりと言ひ納められているような氣がするのです。殊にも、「大らかに念仏を申し候が」などという言葉は、なんとも言えず風韻のある大きな言葉で、救そのもの、悟りそのものを、ずばりと言ひ当てられているような氣がします。

わたしは、成道とか、悟りとか、救いとかいうことは、寺院にこもつてばかりいては絶対に得られぬものだと思います。多くの人々の中にもまれ、もまれて、それこそ、芋洗いの大乘道というか、もまれ、苦しみ、歎き、歡喜している間に、少しづつ、少しづつ、愛して愛さず、憎んで憎まずの風光が分りかけ、自分が生きているといふことはどういふことを真剣に考え初

め、人を愛し、人を憎むことに徹底した、ギリギリの極地に、ひらめくような転換が起こって、生かされていると体で受けとめるところへ、転入するのではないだろうか考えるのです。いや、考えるものではありません、わたしの場合、そうであったのです。そうであったから、その通りに言うのです。そして、それ以外にないと思うのです。こういう転換をずっと大きくしたのが、釈尊の成道なのかな、法然上人や親鸞上人の念仏の世界なのかなと、しみじみとした喜びの中で思ったのも、もはや十年の昔となりました。

真如会（しんによえ）というささやかな会をつづけていられることも、肉親は一人もないこの東京という広海の中で、愛欲に呻吟したり、窮乏に耐えたりしながら、ともかく自分では大らかに、若い人々の命や、年配の方々の命を見守ったり、見守られたりしていただけることも、その時しみじみと手を合わして初めての仏の名を呼んだ時の喜びが、今なおわたしの命を包んでい

(童)(心)(仏)(心)

おまわりさん

遊園地から三人の女の子が、浮かぬ顔をして出て来ました。

やがて私の立っているバスの停留場まで来ると、料金表を見上げました。

「ほら。やっぱり一人十五円よ。だから一人分だけお金が足りないわ。」

「おじさんが、お金を貸してあげよう

か。」

「知らない人からお金を借りるのは困ります。歩いて帰るわ。」

「そう。それなら、あの角の交番で、おまわりさんから、お金を借りて行きなさい。」

「あら。おまわりさんて、そんな親切なの。」

「やさしいおまわりさん」と社会科で勉強したはずなのに、この子たちは、おまわりさんをどう思っていたのでしょうか。

(輝)

るからだと思っています。父・母・姉・妹・友・愛する者の死と、坂道を転げ落ちる車輪のようにわたしを襲った死の連続が、かえって、無量の他者の他者の命に眼を開くようになった機縁を、仏のはからいであったと、ずしりと重く深く受けとれるようになったわたしを、ありがたいと思っています。この気持がなかったら、「成道」などという空恐ろしいような題を与えられて書く気持にはならなかったことでありましよう。

六祖慧能をとりあげたのは、六祖が「一教起請文」に言われた、「一代の法をよく

よく学すとも、一文不和の愚鈍の身になして」の言葉にびたりとはまった禅者でありなつかしい人であり、わたし自身、学問しても法縛にならぬように常に心に戒めていたところから、この人の言葉をまず借りたかと考えたからであります。仏教の学問を修めながら、あるいは仏飯を頂きながら、仏教者として生きているとはお世辞にも言えないような人々が多くなって来ている今日、「一向に念仏すべし」とは、「一人でも良いからしあわせにし通せ」ということだと腹に据えて、一日一日の成道を、永遠につづく成道への道を、歩きつづけたと思っています。

映画続「親鸞」の

法然上人への感激

内山 憲 尙

×

六月二十一日、映画「親鸞」の封切を見る。「日蓮上人と蒙古大襲来」を見た時と別

の意味で宗教映画らしさを感じたが、青年親鸞（範宴）と玉日姫との恋愛と仏教信仰へのギャップの苦悩を描いたものでいくらか甘さがあった、所謂宗教映画としての感激に乏しかった。もう一つは法然上人との関係がとり上げられていないのでいささか物足りなく映画館を出たのである。

續篇の製作中であるというので、この点についてはいささか安心もし、また、大きな期待も持っていた。

×

九月二十七日「続親鸞」を東映会館で見た

日姫と相想うところ、そして、恋と信仰とのなやみに、叡山にかけのぼるところで終わっている。

続篇は、六角堂へ九十九夜参籠するところから始められている。途中、法印聖覚に逢い彼から「黒谷の吉水禅房に在わす法然上人にお会いにならないことは大きな不幸です」と教えられて、吉水を訪い、法然上人の弟子となるとところ、法然上人から許されて、玉日姫と結婚に入るところまでを描いているのである。

×

一般映画としても、宗教映画としても、前編より、續篇の方が盛り上がりがあり、変化があって見たえのあるものになっている。

元来本映画は吉川英治の原作「親鸞」によるもので、前篇は「去来篇」「女人篇」とを描いた、親鸞が法隆寺で修業し、叡福寺に参籠して、聖徳太子に靈感を得るところから、王

田坂具隆のメガホンも続篇で力のある腕のサエを見せているし、中村錦之助の親鸞も前篇よりも力演をして、宗教映画への馴れを見せている。

脚本の成沢昌茂は、前篇から引き續いて、吉川英治の「親鸞」の原作に忠実に取り組んでいる。続篇、吉水の講筵のあたりは最も真剣に原作を生かしている。

×

特によかったのは月形竜之介の法然である。温厚篤実な風貌、柔和で慈悲にみちた顔そして、悠揚せまらざる態度、理知に満ちた様子の中に熱烈な信仰を包んだありさまは、知恩院蔵の法然上人御像を見るような感じがした。

しかも、親鸞の錦之助とは意気がピッタリと合って、言葉のやりとり、演技のはしにいたるまで、よきコンビとなって、この映画を生かし、宗教映画とし、浄土門の在り方を簡明瞭に教えてくれているのである。

×

「往生とは、必ずしも最後という意義にはあらず、死にも非ず、文字どおり、往きて生

きること、即ち、往生なのでござる——往きて生きん哉、往きて生れん哉。御仏の功力

——大慈悲の恵みこそは——生きんとする者のみこそ、始めて無遍の照光あるものでござる——私は思わず感極わまって、涙ぐんでしまった。

「わが浄土門他力の御法は如何といえは……あまねく諸々の衆と共に、安樂國に往生すること……曇鸞大師は、仙經を焼きすてて他力に帰し、道綽禪師は、大集月藏經のうちに億々の衆生、行を起し道を修すといえどもまだ一人も得たるものあらず——と末法の世を喝破してある言葉を一読して、驕然と悟つて、聖道自力の旧教を捨て、浄土他力の真門に入ったということでござる。その他、わが朝の先徳にも、空也、源信、良忍、永観などみな、習ひ研きたる知恵も行もすてて皆、念仏の一行に、往いて生れたる人々ではござらぬか。お疑いあるな、善人も悪人も、知者も愚者も、男子も女人も、ただ南無阿弥陀仏とのみ唱えて、深く思い入れ給うならば、百人が百人ながら、往生には洩れぬものでござる——私は再び三たび胸にひしひしと迫つ

てくる高なりを覚えて、ハンカチを出して眼に当てた。

×

脚本の成沢昌茂は仏教に造詣深い人と見えて、一枚起請文を引いて「念仏を信ぜん人は、たとえ一代の法を能々学すとも、一文不知の愚鈍の身になして……」と続いた。

ここでも私は、法の鞭で私の身体を打たれるような思いがした。私自身、そらんじて、あれだけ読みならして来た一枚起請文ではあるが、「お前の現実の姿のなかには、まだ知者の振舞がないとは言えないぞ……」というように私の心にしみじみと響いて、自分が恥しくなった。

×

「続親鸞」はクライマックスとしては、親鸞と玉日姫とをのせた輩（くるま）を数百名が襲う加茂河原の大乱闘の場であるが、ここはただスケールが大きいだけのことであり心を打つ点に到っては何ものもないのである。

吉水に於ける説苑、親鸞と法然上人の対話による宗義の説明から言って、「親鸞と法然」の映画であるということもできる位に二

人がクローズアップされて描かれている。

×

私は「続親鸞」を見ながら考えた。法然上人も立派に映画化される」と。——小矢児のところ、熊谷直実の入信、大原談義、鈴虫・松虫、耳四郎（天野の四郎）等劇的要素をもっている。幸い、佐藤春夫氏の作品もある。七百五十年の御忌の記念事業としてでもいい、是非実現して貰いたいものである。

お詫びとお知らせ

本誌が大変に遅れ十一月十二月号を合併いたして刊行いたしました事をお詫び致します。

尚新年号は十二月中旬に刊行の予定であります。又、今後は編集スタッフを加え定期発行を致しますので御期待下さい。

（浄土編集部）

身辺雑記



村田嘉久子

事もありました。

今考えると実に無邪気なもので、いたづらをした時一番悪い仕置きがお蔵にある金仏様の前へ座らされる事なのでしたから、そして其の金の仏様がジッと見据えていらっしやるのを恐ろしいもののように思って幾度もおわびのお辞儀をしたりした事を今思い出しますとはほほ笑ましい気持ちになります。

○

ものでした。それはお寺へ行ったかえりには

何かおいしい物が食べられるとか、その頃母

がよくかえりに川の眺められるそばやへ入っ

て天ぷらのおそばか何かあつらえて呉れるの

と川を見下しながら待つ間の楽しさ、又は乳

母にせがんで夜店でつまらないおもちゃでも

買って貰う時のうれしさ、子供心にお寺へお

詣りさえすればおいしい物が食べられ、おも

ちゃが手に入る、という具合に考えたものか

又その次にお詣りする時はよく仏様にその御

礼を申上げるのだと母から聞かされ一生懸命

になって合掌して仏様を拜んで御礼を言った

す。

すべて宜い事にせよ悪い事にせよ父や母は

私達に（姉兄、弟妹多勢ありました）み仏を

前にさとし居られたので、今もって私はす

べてをあなた任せ、つまりみ仏の思召のまま

に、という気持ちで毎日を通して居りますのも

父母のおかげかとも存じて居ります。

勿論何もせずに只み仏をたよりに生きて居

る。という事ではなく、すべてのつとめはお

こたひなくやって居ての事です。

どんな災害が来ても、どんな困難な事件に

苦しめられる時でも、自分が正当の道をふん

私の家では祖父母又父母、すべてが非常に

信心深かった為、私は幼い時からよくお寺へ

連れられて行く機会が多うございましたので

み仏へ手を合わすという気持ちが極く自然に養

われて居りましたと見えて、そのまま成人し

ても其の気持は持ちつづけて来られたので、

その点大変幸せだと思つて居ります。

その頃、母に連れられて墓詣をする事や又

乳母に手を引かれてお寺の境内にあるお地藏

様の御縁日に行った思い出など、誠に楽しい

でさえ居ればきつと助けて頂ける、という自信さへ持って居ります。

ことに戦災後は一増そうした気持が多くなりました。あの戦火の真中に日比谷の邦楽座（今のピカデリー）へ出演して居てそのまま猛火の中を銀座へ逃げ又それから築地の魚河岸の処まで逃がれ、ようよう翌朝雨のそばそば降る中を芝の松本町へ戻り焼野原になった跡を妹達をあちこち尋ね廻ったりした時にも、何か後に随つて居て下さる眼に見えない、然し力強い何かを感じて居て少しもひるむ事なく行動が出来た事を今思うと不思議でなりません。矢張り子供の時から手を合わせて仰いだみ仏のお姿をはっきり意識して居ただと思います。

○

最近になって事々物々すべてが忙しくせわしくなつて来て朝夕のおつとめもおこたり勝ちで、なんとも申訳ないのですが然し幼い頃からつちかわれた気持は決して忘れる事なく、どんな時にもみ仏を信じて処理して行く

事が出来るので安心して毎日を過して行かれる点で本当にありがたいと思つて居ります。

処で私は性来の病弱の為二度大病したので小々恐くなり舞台も休み、時々テレビ位に出演して居るのですが、今月の（九月）東京秋の特別公演というのに、作者北条秀司先生の御希望でタッタート役、それも月末急に決定して出演して居りますが、その役がいんちき占師、つまり祈禱のお婆さんのお役です。

大体私のニックネームに慈光尊じこうそんというのがありますが、これは家の弟子や男衆が昔つけてくれた譚名で、その訳は戦時中あちこちの慰問の旅で随分恐い思ひをしながら地方を廻りましたがその時の私の服装が、モンペー

に頭巾をかぶり右の肩から左へ袋をさげて居るといふ姿で、その頃問題になつて居た慈光尊様の話から弟子が水からはい上つた慈光尊だ……などと言ひ出して大笑いをした事がありました。それがそれ以来すっかり慈光尊の代理のような工合に言われて来たのですが、それがすっかり忘れ去られた時分の今日此頃になつて受持ったお役がなんと「逢坂山根元教々祖

光尊」といういかめしい祈禱師で、しかもこれが悪党で一家をめっちゃめっちゃにするという人間で又一面滑稽でもあるのですが、私はこれにお祈りする時に神仏混合して演じて居りますが、こうした舞台にもしみじみありがたいと思う事は「のりと」にせよ又経文にせよすぐ覚えて舞台へ応用するという事はなかなか至難の事です。幸いに私は「のりと」の方は少々ですが浄土宗日常勤行の中の経文は幾つか知つて居りますので何が幸いになるか知れませんが急の間に合はす事が出来て本当に有難度かつたと思つて居ります。

○

但し仮にも御経文をそうしたいんちき祈禱師のような役で唱えては勿体ないので、それらしく呪文のように音声だけ聞かせて決して本文を唱えずごまかして演つて居りますが皮肉なものでこれがどうやら評判よく氣をよくして居る次第でございますが、こうした経文を唱える役などをよく持つて来られますが、いつでしたか何か母親の役で一生懸命祈願を

生物を殺し恨みを結んで狐狗となり

互に恨みを報いた話

奈良の興福寺の僧に永興禪師と言う人が居ました。俗性は葦屋の君の氏と言い摂津の国手嶋の郡（現在の大阪府豊能郡）の人で、紀伊の国牟婁の郡熊野の村（現在の熊野川流域地方）に住んで修行を致したのですが、或時その村に病人が出て禪師の住む寺に行き禪師に頼んで平癒の祈願をして貰いました。呪文を唱えている時には愈り、禪師がその席を去ると又病気を起す始末、そこで禪師は必ず癒してみせると誓って何日も休む事なく呪文を唱え続けましたが、その内に病人に霊が憑いて「私は狐だからそう簡単には降参しないぞ、禪師無理するなよ」と言うのです。何故かと問うと「この病人は前に私を殺した、だから私はその恨みを報いてやる。もしこいつがひょっくり死んじやえば、今度は、犬に生まれ変わって私を殺すかも知れないから」と言うのです。禪師はそれを聞き熱心に教え悟しましたが遂に霊は病人を放さずとり殺してしま

いました。

一年後その死人が寝てた

同じ部屋で今度は禪師の弟

子が病気で臥せていた時の

こと、ある人が犬を一匹連れてやって来ま
した。犬は盛んに吠えて枷を脱り鎖を噛み
切って走ろうと一生懸命。禪師は不思議に
思い、犬の持主に犬を自由にして何処へ行
き度がつてるのか見ようと提案し、早速犬
を放すと犬は病人の弟子の部屋に走り入り
一匹の狐をくわえて引返して来、禪師が止
めるのも聞かず狐を噛み殺してしまいまし
た。これは死人が今度は犬となって前の恨
みをはらしたのです。

つくづく思うに怨報は恐しいものです。

毘瑠璃王（舍衛國の波斯匿王の子）は過去の恨みで釋種族九千九百五十万人を殺し、恨みを恨みで報いたけれども恨みは尚消えず、車輪の廻るが如しだったと言う話もあります。恨みを良く耐え忍んで恨みを報いない心構えで、怨人に会っても自分の恩師となしその怨みに報いなければ此の人こそ立派です。

（S）

(s)

こめる処で、（テレビでした）何か祈願の御経をよんでくれ、と演出の方かたに言われたので、こうした場合私は家の檀那寺の願行寺住職佐藤賢順先生の処へ伺いに出るのですが、その時も伺うと、それは他の经文ではどれも適当でない。祈願をこめる訳だから矢張り般若心経が宜いでしょう、と仰られたので私は其の時般若心経を半分頃まで上げたのですが、演出の方其の他は大変喜ばれて無事に本番も終ったのですが、さてその後で或る聴視者の人が「村田は有髪の尼とも言われている人だのにあのお経はなんだ、もっとむづかしいお経を上げるのかと思って居たら般若心経じゃないか、般若心経などどんな素人でも上げられる」、と大変叱りをうけた事がありました。それを承知ですべて祈願の時に唱えるものと信じて居ただけにしみじみこうした事はむづかしいものだった事がございました。

X

×

草木物語 ②



——笑って生きて行こう——

合 田 微 雪

戦時中、体の弱い私も人並みに、軍隊の味を知っておきたく、友人の軍医の言も退け、郷土部隊に入れて貰った事がありますが、この部隊長は、所謂職業軍人で無い中年の大尉でした。とても人物が出来ていて、その感化を受けた中隊長・小隊長・同僚はみんな親切で、私は勿体ない程良くせられ、お礼のしるしにと、拙い部隊歌を作ったりした事もありました。

其の後戦後の様子に疑問を抱き始め、地方に住む身にはどうも解せないので、一度上京してみました。そして、市中の喧噪全然聞えず、チーッと蟬の音が間遠にする、恩師のお邸などを訪ね、はじめて知った事は、これ等の方々が一様に個人、つまり自分自身の体を、一番大切に考えておられたのには、深く反省させられました。

その時、私の故郷に空襲ありとの新聞記事、急に帰省する事にしましたが、列車内にもまた親切な人が居て、貴重な銀握り飯を貰ったりしましたが、故郷の老母、妻子の身が案じられて落着かぬ心を、何とかして静める術はないものかと考え、オ、そうだ、「空襲

の報は郷里の駅に着く迄、全然知らなかった事に仮定しよう」と無理にそう決めてからは、とても気が楽になりました。そうして眺めた窓外の風景の美しかったこと、殊に緑の山野など、車中行きずりの人々の厚意と共に、あの時程素晴らしいと思った事はありませんでした。

嫌な戦争も終り、数年経た頃、フト見た新聞の三面に、「某市工場長選挙違反で逮捕」。私達の、曾ての部隊長ではありませんか。或候補の為に、郷里の人々へ賛成されたという。何事を行うにも、裏の裏がある複雑な俗界であってみればやむを得ますまい。

右記事に目を通しつつ、ただ手を拱いていた自分を、今更ながら恥じます。此様な場合にこそ及ばずながら、当時の部隊同窓全員を動かして、何とか氏の為に、報恩の真似事も出来たもの。と思つて、永井氏の旅のご途次、氏に会っていただき、お詫びの一言でも伝えて欲しく思います。でなくとも、永井氏に是非、会わせ度い人物です。

父の代から、何かと芸術家其他の名士と、昵懇になれる機会に恵まれ、多少の作品も家

にあります。然し中には、ただ金になるからとのみで、私の理解出来かねる物も無きにも非ずですが、来客のおいとまされる頃、金にならぬ物の中にこそ、貴重なものがあるという点に氣附かれたら、其人にとっても私にとっても、無駄な時間を費さなかった証拠となり、嬉しいのです。

が、永井氏に対しては、其様な心使いなど、全然不要でした。そして氏にも色紙や短冊などに、いろいろ書いておいてもらいました。が、その色紙短冊たるや、金銀泥入りの、所謂華美な品を避けました理由は、今更説明せずとも、お解りと思います。

「今はしも、みなキリストであれ

黒き友も、白き黄色き みな

釈迦であれ」

というのは早速、玄関に掛けました。

「山もありて、また

谿ありて美しきかな

人の世は

嵐もありてよ」

これは様々な悩みを抱いて見える来客用にと、応接間に。

「草のごと、木のごと生きて

野宿かな」

修養も足りぬくせして、世すて人を憧憬している私にとり、とても魅力的なこの文字は、私の居間に。そして最後に、大版画帖の一つに、私の身に非常に嬉しく、

「ああ母は いつまでも いつまでも

起きている」

題して、「紫峰院御霊前」

「ただ人に好かれる様に振舞うことは容易い。本当に其人の為になる事をこそ」。その為には、例えば自分は嫌われてもいとわぬと、生涯を清らに過した母逝いて四年、いまだにそのしてきた事、残しておいた言葉が、深くこの身に染みて……済みません。斯う私事を並べて。お詫び申します。画帖にもその次の面に、誰人様にも憚らず見せられる様に、

「四海兄弟」

と書いていただきました。思えば戦争耐なりしある日、一書家の訪れを受けました。「撃ちてし止まむ」その他勇ましそうな文字を数々並べて見せ、書かせて下さいとの申し出に対し、私がこの四字を所望したところ、

彼氏目をパチクリさせましたが……。

永井氏から、どの部屋にも果ては便所の中にまで、緑色のもの、則ち植物の鉢を置いていますのを、賞美されました。乾爽な室内にあっては、屋外の緑のうるおいが恋しいもの。私は人様に、よく風景画の額を上げることにしています。それをかかげて置くと、壁面に窓があき、其家から窓外の景色を望み見ている様な、錯覚を起させるからです。

便所にはまた、仏間や私の部屋同様に香炉を置き、いつでも香が焚ける様にしてあります。臭気止めの一役も買ってくれますし、幼時からよく胃腸をこわし、母にも厄介をかけて来た私にとって、病室の延長でもあります故。どうもお話が下になり恐縮ですが、それでなくても元来便所を、神聖な思考の場所として居られる向きも、案外多いと聞いています。

それにしても、壺は多少ありながら、生花がいけてなく、ただ一個所あるかと思えば、それは何と造花なのに、永井氏も不審の眉をひそめられました。

華道を、表現材料に不自由しない絵画芸術

の自由さに近づける為には、如何しても造花のご厄介にもなり、色具も使用、種々のオブジェも必要とせざるを得ません。が、其様な物を用いると、みづみづしい植物で以て室内をうるおしたい、私の主意から外れますし、無精者の身には、じき萎れたり枯れたりする生花道は、また不経済でもあり、不向きです。地方ではまだオブジェ物より、古来の絵画、彫刻芸術の方が一般に、喜ばれている様です。（熊本籠城内で産声をあげられた勅使河原蒼風氏母堂のお話から華道に就てはまた）

永井氏は私方に二泊して、日本三景の一つである宮島の某ホテルに招かれ、もう一度仙島「希望の家」を訪れ、その間二日をおき、また当方に見えました。そのお土産として差出されたのが、宮島山中で採集されたという、何と私が最初自然に憧れて失敗したと同じ所謂名も無き草木の苗。折角のご厚意ながら、根もあまりよく附いていないし、二日経て既に枯れかかったのもあります。それを「あなたの愛情で育てて下さい」と云われ、ホトホト困惑しました。

家の植物は、何も私の愛情故に育ったのではなく、ほって置いても生き抜く力の見事さに、修養の量としたく思ったに過ぎません。然しそれを感じいし買いかぶられた、氏の厚情と貴い童心とを傷づけたく無く、程近い一キロ半ばかりの山へ、再度自然の草木の苗を、探しに行ってきました。

今度は折よく、梅雨に入りかけた時候です。いつの日か、ふたたび永井氏の見えた時には「こんなに成長しました」と云える様に育ってくれよと、ひたすら祈っています。

さて、永井氏は此度は一泊きりで、翌朝はまた流浪の旅へ。また方々の幸薄い人達の心に、明るい灯をとすべく、愛のマンドリンを奏で続けられ、氏の白髪童顔が、地方新聞誌上やテレビ面を、次々と飾ってゆくことでしょう。

お別れの時には、子供はすでに登校して留守故、妻と二人で門外まで、お見送りしました。お互い言葉少くただ「感慨無量です」と氏、「またどうぞ」と私。折からの旭日に影長く、やがて姿遠く見えなくなるまで手を振り、あとで気がつく私の机の上に、一枚の紙

片。

「みちばたに

ろう石 童画を描いている

ふめず ふまずに 拝んで通る

みちばたに

おち水 こぼれて児をえがく

ふめず ふまずに そうっと通る

みちばたに

ふとおちた小枝 十字架つくる

ふめず またげず 拝んで通る」

と書かれ最後に、私に過ぎた感謝の詞が、

しるされてありました。

地方新聞やラジオが、其後県下各市の養護施設等を慰問、そのうち九州路へ向われた様子、と報じました。

故菊池寛氏の「恩讐の彼方へ」で知られている、耶馬溪「青の洞門」で一夜を明かしたとの便りを手にしたのは、それから間もなくのことでありました。

×

×

×

×

大師御生活の管見(1)

兼雅卿の信仰

村 上 博 了

一

文治四年中秋は、後白河法皇六十才世俗に云う本卦かいりの御祝の年に当たっていた。法皇はその御祝賀に替えて、御如法經を営まれたのである。單なる御祝でなしに、亡き人々の供養と後世菩提に資せられたのであった。

京都鴨河の東にある仙洞御所は、八朔頃から夜に日について諸準備がすすめられたのである。

その御如法經会は、めったに行われない有難い行事であった。僧侶として、召されることは、一世一代とも云うべき盛儀であり、光榮であった。誰れもが望んで止まな

東寺の僧を召されたいと云うにあった。

御会について色々の噂は流れたがその中には、御如法經は慈覺大師始行の法則である、他宗のものは適當で無いとするようなきこえも巷間伝えられていた。

他宗の僧とは、我が大師法然上人を指している。上人が早くも召されるとする風聞は立っていたからであろう、大師この時五十六才であった。文治二年の秋、京は大原の里魚大原寺に於ける問答は、すでに當時の人々をして、浄土宗門祖法然上人と云うことで知られていたからである。

東寺の願望は実現しなかった。我が大師法然上人は、勅喚によって召され光榮ある

い名譽である。その(一)の現われをあげる

ならば、仲秋八月十日、法皇は日吉社に臨幸せられた時、東寺の代表執当澄雲から願出があった。今度行われる御会に、

御会の先達と御經衆とをつとめることであつた。

御料紙をむかえ行事の日、あかがねの筒に収められた御料紙が道場に到着すると、良宴以下御經衆は、外に候して伽陀を誦する、正面の障子をあけて、法皇伽陀を行われる。その時我が大師法然上人と禪閣は助音する。御料紙を道場に安置すると、法然上人主唱して行道、ついで声明を行う、その後十種供養或いは伝供なぞあつて、我が大師法然上人の「説法」が行われたのである。

御伝によると、

聴聞の緇素、群をなす

と伝えられ、あまたの人が集り大変な人気であつた。きく人々は「貴賤みな涙をながす」と云う感激であつたのである。法皇におかれても、

ことに歡感あるよし、權大納言兼雅をもて仰下さる

と伝えられる。

兼雅卿は、はからずも、法然上人を目前

に仰ぎ、而もその説法をよく聞かれるよき善縁の機会を持たれたのである

二

兼雅は、花山院相国忠雅公の長男であつて、後の花山院と号していた。母は中納言家成の女である、養和二年三十六才の三月八日権大納言に任ぜられた五月二十七寿永と改元したのであつた。六年後文治四年八月の如法經会には四十二才で、わが大師法然上人にあつたのである。

大師もいまだあまたの殿上人たちとは深い交渉はなかつたらしい、翌文治五年八月一日法然上人は、始めて藤原兼実公に請ぜられている。

兼雅は早くもその前年中秋に、法然上人を知つたのである。注目して見ると、誠に行教共に、法皇の御信らいに添うた立派なものであつた。尊敬は信らいとなり帰依して行つたのである。

御伝には、

ふかく上人に帰したまいて、鎮西庄園の、土貢をわかちて、毎年に施入せられ

けり

と伝えている。

まさに生き如来として、自己の生活の資料である物量を分つて供ようされるようになったのである。

大師上人を有難いと尊敬しなければ出来るものではない。当時の公卿は、兵力を持たず、文治元年十一月廿九日からの守護地頭にいたためつけられながらも、その物量を大師に分たれたことは、並々ならない外護者と云うべきである。

大師とても仙人ではない、雲や霞やつゆを喰して生活出来るものではない。さればとて別して収入の道がある筈もない。生きて行く為には最少の食物が必要である。

かの強盜の張本人であつた河内の天野四郎が発心して阿教と云い、大師の門下には入り、一向専修の念仏者となつて、相州河村に移り住むべく、大師に暇乞いにかがった時、大師のお話中に、

去月に又人もなくて、御房と源空(大師)とただ二人ありしに……

と云う言葉があることによつて判るように、時として夜間は門弟のいないこともあつたようである。

日々の食物も多くはいらないだろうが一人でも生活する時には、それ相応は必要である。

その陰の力に兼雅卿がいたと云うことは、大師御生活の一端を見る上に於て極めて大切である。

兼雅卿は、よろづ質素な生活のお方であつたが、平生は院内に於ては車を用い法皇の信任に答えていた。

併し、大師法然上人を訪われ円頓戒をうけ、念仏法文のお話をきかれる時には車で行かれた。多少のものでも施入しているからには、大師に心配をかけまいとする暖かい配意の一端を見る。

ここしばらくは病に冒されていたが、五十四才の正治二年七月十四日、お盆会に、宿願の出家を遂げられた。十六日お盆会の終了と同時に逝去されたのである。南無阿弥陀仏。

(村上博了)

鐘の夜除と噺人情

男 雅 田 吉



人情と鐘

鐘といえ、江戸時代に刻ときを知らせる為に撞いた「明六ツ、暮六ツ」の鐘がすぐに思い出されます。古今に有名な梵鐘は数々あり、江戸では「鐘は上野か浅草か」と唄われた東叡山寛永寺、金竜山浅草寺の鐘が有名ですが、名古屋以东随一の名鐘といわれるのが、三縁山増上寺の大梵鐘で、これは延宝元年（一六七三年）四代將軍家綱を始め府内僧俗一同の悲願を込めて、江戸品川御殿山で椎名伊予守吉寛が主任となって鑄造された梵鐘で、その高さ八尺、竜頭二尺、口指渡し外り五尺八寸、口厚六寸五分、蓮花座廻り一丈八尺三寸、蓮花指渡し九寸六分、重量四千貫という大梵鐘で、その音は品海はるかに響き渡り、房州木更津で手にとるように聞えたものだといわれています。

この音が海に響いたというのは、二代目林家正蔵（托善）の作で、後に有名な鼻の円遊が手を入れて今日に伝わる落語「野ざらし」の中で、八五郎（ガラッ八）が

「浅草寺の鐘は金が入っているから音が高

い、芝増上寺の鐘は海の汐風に打つかりながら響くから、ボアーン、ボアーンと聞える」という風に表わされています。

この野ざらしという話は、浅草門跡前の裏長屋に八五郎と隣り合って住んで居る尾形某という浪人者が居りましたが、この人は近所の子供に手習を教えており、釣りに行くのが何よりの楽しみ、行く先は向島ですが今と違つて江戸時代の事ゆえ一面の草原で大変物淋しい所です。そこを通りかかると、折しも浅草寺から打出す暮六ツの鐘が鳴り渡り、足許の芦の繁みから鳥が飛び出したので覗いて見ると、水死人らしい體があり、それ可哀想にと持っていた瓢の酒を注ぎかけて「月浮かむ水も手向の隅田川」の一句を手向けて帰って参ります。その晩、深更に妙齡の美人が尾形の許を訪れて、「私は今日あなたに回向をして頂いた者だが、その御礼に参りました」と云って幽霊は物やさしく大いに奉仕をして謝意を表します。ところが何しろ壁一重の長屋の事、不思議な声に気づいて、この場面を覗いたのが八五郎で、翌日委日くその

話を聞き俺もと云って釣竿を借り向島へ出かけます。釣をしながらも「鐘がボンと鳴りや上げ汐南さ、鳥が飛出りやコラサノサ、骨があるサイサイ」と鼻唄を唄うやら水をかき廻すやらの騒ぎです、その跡で芦の茂みを探して歩くと、累々と骸骨がありますので、それへ万遍なく酒をかけて「今夜来ておくんだよ、腰障子に丸八と書いてある、いいかい、家を間違えなさんなよ」と独り言を云って来ます。それを傍らの屋根船の中で聞いていたのが幫間で「これはいいい事を聞いた」とその晩押掛けると、八五郎は面くらって、「お前は何だ」「私はタイコです」「あつ、それではあれは狸の骨だったか」と云うのですが、鐘の音に諸行無常の声を聞き、無縁仏の菩提を弔い、今日は善行をしたと感ずる仏心がその背景に流れていると云えましょう。

現代の我々には鐘の声というのはこうした、落語、講談或は歌舞伎の中等で、物語りの効果を上げる小道具として聞く機会が多いのです。特に歌舞伎の世話物狂言によく取扱かわれる心中場面等では、「七ツの鐘を六ツ聞いて、後の一ツは冥土の土産、南無阿弥陀

仏、南無阿弥陀仏」と云う近松の有名なセリフに代表される様に無くてはならない音となつていますが、而し現代の生活はメカニズムに支配され、騒音も多過ぎますから鐘の声に感傷を持って耳を傾ける事が無いのが普通です。

除夜の鐘

ところが大晦日の除夜の鐘には全国の人々に人間として過去、現在、未来に対する深い感慨を持たせる響があります。恐らく除夜の鐘を知らない、或は聞いた事は無いという人はありますまい。この除夜の鐘は仏教が吾国へ渡来すると共に始まった行事で、特に鎌倉時代以降全国に広まったものです。年も暮れはてて夜も更け亘った時、突序周囲の静寂を破って、彼方此方の寺々から響き渡る百八ツの鐘の音を聞く時には、その響きに一人一人が人生の一齣々々をそれぞれにかみしめて新しい年への感激を心の奥底に沸かします。そして深い内省の一刻をもつのです。この鐘が百八点撞かれるのは、仏教では、私共の身や心の、悩みや、煩いや、惑いをひき起すはたら

きを様々な角度から教え訓して百八煩惱とすることによせて、百八の法音をもって、それを除き救おうとするためなのですから、その一声々々は人生の一齣々々の反省であり、懺悔であることに外なりません。

百八点の鐘は、弱く五十四点、強く五十四点撞かれますが、その内百七点を古い年に、最後の一点を希望に満ちた新春の第一を刻むものとして新年に撞くならわしになっています。それは真の人間としての生活の宣言として、新たな年の希望の鐘、初鐘へとうけつがれてゆくのです。この除夜の鐘が前途を祝って真の人間の為に響きその声にしみじみとした味を沿えている落語に、大物の人情噺として有名な「芝浜」があります。大晦日の人情を扱った噺は「穴どろ」「言訳座頭」「掛取万歳」「狂歌家主」等の借金の言訳けを主にした物や、「水屋の富」等一連の富くじ物等があります。大晦日ともなれば金が主役となる事、現今の年末闘争を見ても今も昔も余り違いが無いようです。こうした多くの噺の中でも、人間の欲望、怠惰、それに対する無欲と精進を上手に編み込んだ「芝浜」は矢張

り出色のものと云えるのではないでしょう
か。

哥沢の文句に「一ツ芝浜で縞の財布があつた
とさ……」というのがありますが、この様に「ひ」と「し」の発音が同時に使われているのが江戸弁の特徴ですが、この癖の主人公金さんも金杉辺に住むチャキチャキの江戸っ子で商売は魚屋です。他に道楽はないのが酒を飲むと仕事を怠けるというのがなにより
のキズで、その為に諸方借金だらけ、暮れを控えて愈々夜逃げかという所まで来てしまいました。ここ迄来て金さんも漸く目が覚め、女房に勧められて金比羅様に禁酒の願をかけて、明日から一生懸命商売に精を出そうという
う気になりました。悪いと思いつつも最後のドタンバにならないと限りがつかないのが人間の弱さであり今も昔も変りはないようです。翌朝早く女房に起されて買出しに行くのですが、何しろ願掛けして精を出すと云うのですから女房は嬉しくてオチオチ眠ってもしられ
ません、そこで一刻も早く起してしまいましたからまだ夜が明け切りません。そこで金杉から京橋へ行く途中芝浜の海岸沿いで浜

辺へ下りて顔を洗いました。すると足許に落ちて
いるのがずっしりと重い金財布、それを拾って開いて見ると二分金で五十両という大金が入
っています。金さんは大喜びで急いで家へ帰り、早速友達を呼んで来て飲めや歌え
の大騒ぎ、友達が帰って金さんはそのままグッスリと寝込んでしまい、日が暮れてから
漸く起上ると、女房が「もしお前さん、ううべ酒を止めるとあれほど誓っておきながら今日
の始末は何事です、第一酒屋の勘定はどうする積りです」と畳をたたいて強意見、「どうする
って、あの芝浜で拾った五十両で払やいいだろう」「へーそんなお金はどこにある
ります」「お前に預けておいたじゃねえか」「イイエ私は預りませんよ、大方お前さん夢
を見たんでしょう」「なに夢だ、そりや大変だ」、金を拾ったのが夢で、酒を飲んだのが
本当とあっては大変な喰違いです。金さんはそれから全く禁酒して一生懸命に働
きます。

元々気ツプの良い江戸っ子の魚屋が真面目に働くのですから顧客も沢山殖えて、生活も豊かになる、丁度三年目の大晦日、仕事も片

扉の御法話

あみだ様の本願を信じ、お念仏を唱え、往生極楽をねがう人は、日常どんな様子で暮しいるかというのに、世の中のことには不満をいい嘆き、不足を感じている
ものです。

というのが、この御法語の意味です。「まめやかは」に、本当に、真実にこのこと、「おもい入る」は、深く考え熟慮すること、「気色」は、有様、様子のこと、「ひとくねり」は嘆くこと、愚痴ということ、「恨たる」は、恨むこと、不満に思うことです。

普通ならば、本願を信じ安心して生きる人の日常は、晴々しい顔つきで生活にはげみ、ものに感謝しながら暮しているのを知っているだけ、この御法語は一寸逆のことを申されたような感じがします。

この御法語は勅修御伝第二十一の常に仰せられる御詞の一つにあるもので、上人が常々申されたもの、誰の耳にも懐しくとどまっていた御詞です。従ってこの御法語の前後に関連するお詞がないわけ、何度か繰り返して拝していますと

付き正月の用意も調い、畳の香も新らしい茶の間で夫婦差し向いで睦じく福茶をすすり乍ら静かに暮れて行く年を偲び、新らしい年への希望を語ります。全く二年前迄の苦労は夢の様な幸福な姿です。その時女房が神棚から下ろして金さんの前に置いたのは芝浜で拾った財布、驚いている金さんの前に女房が頭を下げ、「芝浜で金を拾ったのは夢ではなかったのですが、拾った大金を無断で使えば罪になるし、その金があるとえばお前さんの気が緩むといけないと思い、実は家主と相談の上で、お前さんには夢だといって欺し、お金はお上へ届け出た所、一年たって落し主がないのでお下げ渡しになりました。直ぐにお前に話して詫びようと思ったが、折角氣を入れて商売に精出しているのに、ここで氣を緩ませてはと今迄黙って居りました。もうここまですれば大丈夫と思って出しました、今迄お前さんを欺していたことは申し訳ないが、こういう訳だからどうか勘弁して下さい」と詫びをいいます、金さんは怒るところか女房の心掛けを喜んで礼をいいます。折しも近くの増上寺一山の除夜の鐘が辺りに響き渡りま

す。そこで女房が「サアお前さん、今日はお目出度いのだから一ト口飲んでおくれ」と酒を出すと、「久し振りで一杯……イヤ止そう、酒は飲むめえ、飲んで又これが夢になるといけねえ」と落ちになりますが、金さんの胸の中には除夜の鐘の音と共に思い出す過去の自分の姿、女房の苦しみとひき比べて今夜の幸福は本当に夢の様であり一杯の酒の酔等では到底得られない、阿弥陀仏の極楽に有る様な氣持があったのではないでしようか。そしてこの幸福は他から偶然に与えられた財布の金ではなく、自分の精進努力の汗の結晶であり亦妻の夫を欺していたといってもそれが何もかも夫の為であるという必死の愛情の賜物である事を知る様になっていたからなのです。除夜の鐘に真の仏の道を知った夫婦には新らしい年も希望に満ちているでしょう、と思わず拍手をおくりたくなります。人の世の情は何時の世にも変らないものです。

正覺大音 さとりのひびき

響流十方 はてなく流る

来し方の罪科を懺悔し、仏のみ教えに生かされて、新たな年を元氣いっぱいに進もうではありませんか。

(完)

こちらの氣持によって、いろいろの意味にとれます。それだけに奥深いお詞といえるわけですから、ここにおいても、何も申上げずにおくのがほんとうでしょう。しかしご参考までに二三申上げますと、第一には、その日その日を反省し懺悔し、真剣に暮すということでしょう。「昨日もいたづらにくれぬ、今日も又むなくあけぬ。今いくたびかくらし、いくたびかあかさんとする」の御法語を思い浮べます。

またお念仏は「願くは諸々の衆生と共に、安樂國に往生せん」と、独善を排し、更に自分独りの往生を願うものでなく衆生とともにいうので、このことを考えれば考える程、のんきに暮してゆける道理がありません。

またお念仏は、未来に生きるものであります。未来のためにお念仏を申すので現在を楽んだり、今の苦しみを避けるためのものではありません。従って今日、快樂を追うものでありませんので、常に努力があり苦心があります。現在に満足があるわけではありません。

(村)

新篇百喩経(九)

二六 対彼説法

私が、東京府(その頃は)に、務めていたころ、Sという男がいて

「何でも課長の、好きな趣味を知って、これを自分も覚えて、調子を合わせる必要があるよ」

といって、彼自から、是を実行し、将棋課長には将棋、麻雀課長には麻雀、碁には碁という調子で、課長宅へ入り込んでいたが、その為か、人よりも早く属官になった。

さて此の人物を、ほめるべきか、けなすべきか、今日の御時勢は……

二七 自業体験

江戸時代の小唄に、こんながある。
ある人が、「金を拾うと、嬉しいというが本当かしら、一つ拾ってみたいもの」
と思って、自分の金を投げて、拾ってみたが

「少しも面白くない」

と又やってみたが同じ事だ。

しまいに少しやけ気味に、遠くへ投げたら、見えなくなってしまう、此度は本氣になって探し始めて、ようやく探し当てた時「ああ良かった、なる程金を拾うと、嬉しいものだ」

といった。何か我々に教えてくれる、奥深いもののある話だ。

二八 鼻欠け地藏

××寺に、鼻の先がチョイと欠けている、やさしいお顔の、石地藏さんがある。

その鼻の欠け工合が、何ともいえない、愛嬌をそえて、思わずほえますのだ。

老僧が、特に可愛がっておられたが、その後、この老僧が亡くなり、久し振りにお伺いして、早速このお地藏さんに、お詣りして、

「アッ」と叫んだ。

あの欠けっぷりの美しい鼻が、セメントで隆鼻術が施され、それも妙にツントした、いやにおすまじな、気位の高い奥様のようだ。

何と心無い事をしたのだろう。折角よいものを失うとは、

二九 倍增稲荷

寛政の頃、倍增いなり、というのを興行して歩いたものがあつた。

稲荷を祀り、是にさい銭を挙げると、倍になって、即座に戻ってくるのだ。

一文献げておくと、翌日は、二文になって戻してくれるのだ。或る欲張りの男が、家事の金を集めて、二十両の金を献げ、さて翌日、四十両になって戻ってくると楽しんで、お詣りにいったら、稲荷の一行は、どこかへ逃げ失せていた。

三〇 おがみ屋

A子さんのご主人は、終戦近い、昭和二十年二月、応召で出征した。それっきり帰ってこなかった。

終戦になって、そろそろ帰還してくる者があるのに、生死の程が判らない。

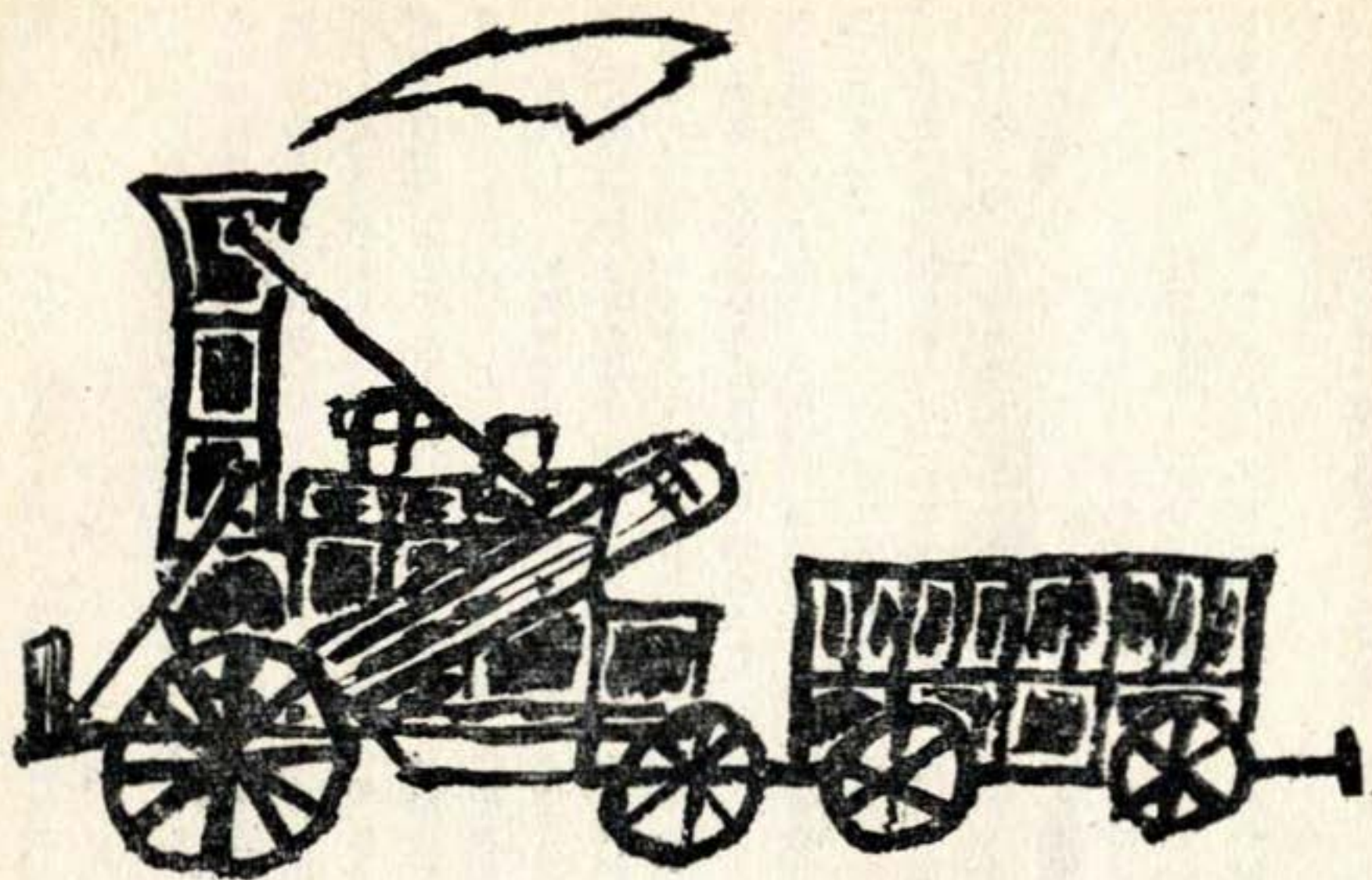
行者に見て貰ったら、「元気でいるから、帰ってくる」という、喜こんで楽しんでいたが、なかなか帰ってこない。

そこで又行者の処へ行つた、

「では早く帰るようにお祈りしましょう」とのこと、祈ってくれた。そして莫大の祈禱料を、何回かとられた、しかし今でも帰ってこない。

子供の怪我（下）

村瀬 秀雄



☆

手術といえはすぐ麻酔を思い出しますが、この場合は麻酔をかければ、そのままショックで絶命する

そうです。従って麻酔はかけ得ず、一か八かで手術をせねばならぬという終点にまで追い込まれたわけです。間かつ的にどこからあれだけの大声が出るかと不思議に思われるような「ギャー」という絶叫が続きます。これは脳膜炎の発作で、病人が知らずにふりしほ

る声でした。瞳孔がすっかり開ききったまま、四日間もの昏睡を続けてきたのですから、当人にとって何んらの意識も感覚もないのは当然です。

しかしこうしたことは、後になって考え及んだことで、現に五才の末子が手術台にのせられ、二人の看護婦が両手両足を力一ぱい押えつけて、頭部を切り開く大手術を受けている状態を考えながら、地獄の底から絶叫するような異声を聞くのですから、親としていても立ってもいられないわけでした。

たまに手術室に出入する看護婦があれば、

その顔色から手術の経過を読みとろうと努めました。もとより予測はできませんでしたが。

その内例の絶叫が聞えなくなりました。聞えなければ尚のこと経過が疑がわしく思われ、さっきまでは間違ひなく生きていたものをと心配になりました。その内、一人の看護婦が手術室から出てきて、院長が室内で私を呼んでいるといいました。私はさてはと思ひ、医師の宣告は受けているのですから、今更に大勢の医師と看護婦の前で取り乱さぬよう、ことに至っては止むを得ないことであると、大きく息を吸い込んで、腹に力を入れ、手術室に入りました。手術室は蒸気消毒でもしてあるのでしょうか、ムツとする熱さを感じました。殺風景な室のまん中に大きな白布で覆われた手術台があり、その一方に医師たちがのぞき込むように集っていたので、そこが頭部だと思ひ、私はその方向に歩いてゆきました。すると院長がふりかえり、「怪我の状態をみてもらおうと思つて」といいました。

白布には穴があいていて、切開かれた頭部

が露呈され、その下にある子供の顔等は判る道理がありませんでした。医師たちは私のため道をあけてくれたので、私は手術台に近ずきました。切り開かれた所から大きく白く頭蓋骨の一部が見えました。その頭蓋骨には二種位の楕円形の穴がポツカリあいて、院長がしきりと穴の中をさぐっていました。この穴に相当する骨片は、ちょうど菊の花弁のように放射状に割れて大脳の中に落ち込んでいるのです。院長がその骨片を拾い上げている所で、金属の鉋状の器具と骨とがふれ合つてカチカチ音をたてていました。その音は微かであつたのかも知れませんが、私には雷の如くに耳をうち、その音はこの世のもつとも思へませんでした。一人の医師が私に、この骨片は八つに割れ、それを拾い上げて、寄木細工の如くもとのようにならべてから、皮膚をかぶせ縫合するのだと説明してくれました。

私は目がくらんで見るに耐えず、深く頭をさげて手術室を出ました。それから更にどの位の時間が過ぎたのでしょうか、私には、半日にも一日にも思われてよく判りませんが、知らぬ間に陽が暮れていました。

やがて院長が手術室から出てきました。私の顔をみるなり、「最善をつくしました。これ以上は私の手におえません」と一言いって立ち去りました。私は院長の後姿に深い感謝で頭を下げました。手術室の扉がさつと開かれ、子供が台にのつて出てきました。相変らず眠つたままでしたが、私の前を通るとき、チラッと眼瞼を開けました。私の心は急転直下明るくなりました。

手術後は発作が止んで、微かな呼吸が続いていました。その夜私は初めて足を伸ばし、寝る気で横になりました。私ばかりでなく家内も附添看護婦も一度も衣服を脱いだことがありません。横になるのも、着たまふのことでした。

☆

五日目の朝になつても子供の病状は同じでした。回診の医師の話によると、手術の経過は別として、頭蓋骨を半周以上している大ひびがあるので、その方の病勢が心配だのとことでした。しかしほんの一回にしろ眼瞼を開けてくれたことで安心した私は、買物もあり、一杯のお茶の馳走にもあずかりたく、知

人の家を訪ねるために、初めて外出しました。

知人のところで雑談していると、病院から電話がかかり、病勢が変わったという知らせを受けました。私は今度こそはと思い、知人に親せきへの打電を頼み、とんで帰りました。すると子供の手や足に軽い瘰癧のような、引きつるような様子が見えたので応急の注射をして頂いたことでした。その夜、親せきたちは喪服の用意をして病院に集まってくれましたが、私どもの様子を察して夜も更けているのに黙って帰ってしまいました。

六日目の病状も同じでした。回診の医師は、薬物による生命の保持はすでに限度にきている由を説明してくれました。私も止むを得ないと思いました。少しでも衰弱を延ばし、一呼吸でも多くしてくれと願いながら、呼吸の一つ一つを教えるようにして見守っていました。それと同時に砂糖湯をつくり、それを匙で口に入れてやりました。砂糖湯は一口に入口に入りますが一杯になるとそのまま口の外に流れ出してしまう。それでも私は諦めることなく、終日砂糖湯を口に入れて

は、流れ出るのを、拭きながら、その日を過しました。

七日目のことです。私は子供の掌を撫でたり、動かしたりしていました。何の気なしに掌を顔の方に動かしてやった時、私は子供の掌に、子供の力が加ったことを知りました。私は子供の掌を子供の口の方に動かしてみると、何回かやっている内に子供の無意識の力が、掌を口の所にあてようとする働きのあることを知りました。これに元気づいた私は、更に匙を握らせ、その掌を動かしてみると、微かながら子供の唇が動いたように思われました。更に一步を進めて、匙に砂糖湯を入れ、口に持って行ってやると、初めの何回かは効果が見えなかったものの、遂には砂糖湯を口に入れました。私は根気よくこうした努力をしている内に、はたして自分の手で口に持って行った砂糖湯を飲み下しました。

医師たちも看護婦たちも、知らせで病室に集ってきて、私が子供の掌に匙を握らせ繰り返し口に持ってゆく内に、時には砂糖湯を燕下する様子を見守っていました。そして医師は「これで生命はとりとめた」といいまし

た。

八日目、私は幼児の牛乳びんを買ってきました。私が牛乳びんを口に入れてやっても決して飲まず、必ず自分の掌に持たせて口にもってゆくと飲みました。医師は無理をして窒息させては大変だと心配してくれました。それからおむつの用意をしたり、玩具を買ったり全く赤子から育て直すと同じことになりました。

☆

このようにして、一度死なせた子供の生命をついにとりとめたのです。私は改めて子供をもうけたような気がしました。かくして子供は助かり、全快したのですが、その後の経過を簡単に申させて頂くならば、初めてのめた牛乳がウエハウスを食べることになり、それがパンとバターに進みました。一度口から栄養が入るとなると驚くばかりの回復力を示しました。私は余りの嬉しさに悲報を打電したことも忘れたように、今日はウエハウスを、また今日はパンをその時々食べたことを親せきに電報を打って知らせ、後日笑話にされましたがその当時は、夢中で、打電せ

ずにはいられなかったのです。

しかし瞳孔がもとのようになり、視力を回復したのは、約一月後でした。医師が懐中電灯を目の前で照らしても反応がなかったのがどうやら視覚を生じたらしいと思われたのは、瞳孔が回復して行ったのと同時でした。

また聴覚は更に遅れました。聴覚がいつもどったのか、よく判りませんでした。私どもの話が聞えるような気がして、名前を呼ぶと目をその方に向けようと思いました。従って程度のことは別として、耳の方も段々と聞えてきたのでしょう。

最後に言語が残りました。子供の顔のそばで、私が何をしていたのか、とにかく子供の口が動いて、確かに「アメ」という音が出たと思ったのです。すぐ家内にそれをいうと、

家内は一生懸命に話しかけますが、もう口を閉ちて何も申しません。やがて看護婦が入れかわり立ちかわり来ては、話しかけますが、すましたままで平気な顔をしていました。その日はそれで終り、翌日、私が話しかけると再び口を動かして、確かに、「パン」といいました。それ大変だといわけて、医師た

ち、看護婦たちが試みましたが、何うしても言葉、いや音すら発しませんでした。こうなると私の聞いたアメやパンは親の幻聴に相異ないとされてしまいました。ところがそのまた翌日にはほんとに片語をいい出したのです。

さて運動神経の方はまた大変でした。医師は全身不随だといっていましたが、約一ヶ月半経って左半身が動き出し両手両足がどうやら動き出したのは約二ヶ月後のことでした。私たちは一度も目を開けずに死なれては、思い切れないと思っていたのですが、いざ回復に向えば、欲には限りのないもので、せめて半身でも自由ならばと念ずることになりました。それだけどうやら全身が動くとなれば、まさに夢みる心持といったところでした。

このように日目の回復を楽しみに、看病していましたが、熱は退院まで三八度以下になりませんでした。ただし医師の説明によれば、脳の出血を回復させるために熱が高いので、さしたる心配はないということでした。

幼稚園はもちろん退かせましたが、子供の生命力とでもいうのでしょうか、私たちの心

配をよそに、子供はぐんぐん回復し、やがて友達と一緒に悪戯を始めるようになりました。

☆

これも後から知ったのですが、小学校に入ってから、担当の先は御苦労したようです。

一時限の我慢ができず、途中であっても、フアリと一人で教室から出てしまい、運動場の隅で遊んでいたことが毎日のようだったそうです。いわば精薄児のような状態で、この子供一人のために手数がかかり、他の児童にもどの位迷惑をかけたか判らぬに相異ありませんでした。成績は当然のことに、最劣等の連続でした。しかし私は子供の手足が満足に動くだけで嬉しく、その外は全く気になりませんでした。

それが今回、先生がお世辞にも成績が上ったといい、子供自身も宿題等自分から勉強する気になってきました。運動会では、とにかくクラスの選手としてリレーに出ましたが、結局競争では敗けたものの、参加賞の鉛筆二本を持って帰ってきたときは、私は自分の部屋で独り感に耐えていました。

(了)

目次一覧表

浄土 正月号 目次

表紙・屏絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

子君放談……………武田秀郷……………(8)

年頭所感……………椎尾弁匡……………(2)

選択の社会……………山本空外……………(4)

輪島聞声尼伝……………大橋俊雄……………(18)

死に対するもの……………森 赫子……………(22)

横川への道……………高橋良和……………(24)

インド紀行8……………斎藤昭俊……………(20)

童話 きいたお祈り……………伊東挙位……………(28)

法然上人の感化……………村上博了……………(26)

新編百喻経(1)……………K I……………(7)

信仰相談…………………………(32)

浄土の三部経……………佐藤賢順……………(11)

一扉の御法語……………(22) 一童心仏心……………(38)

釈尊の生涯(六)……………佐藤密雄……………(34)

浄土 二月号 目次

表紙・屏絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

浄土宗日常和讃勤行法……………吉田定久訳……………(2)

わかる仏教と出来る仏教……………竹中信常……………(4)

称名一途……………三井高陽……………(6)

畢竟依……………石原宥政……………(9)

パンザイ……………武田秀郷……………(19)

心において……………秋 松子……………(29)

惣れ惣れと念仏申そう……………太田千秋……………(12)

見えぬ世界……………森 赫子……………(22)

実話 悪魔の領土……………岡 幸一……………(26)

高僧伝 勤息義城……………大橋俊雄……………(24)

法然上人の感化……………村上博了……………(30)

新編百喻経②……………伊東挙位……………(12)

信仰相談…………………………(32)

石川啄木(1)……………須藤隆仙……………(34)

扉の御法語……………(22) 「法然」を
読んで……………(4036)

童心仏心……………(39) 会員だより……………(4036)

釈尊の生涯(七)……………佐藤密雄……………(14)

浄土 三月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

美しき彼岸……………宮林昭彦……………(6)

小鳥の説法……………佐藤賢順……………(2)

単直信仰の行者……………北出立仙……………(28)

身辺雑記③
感情……………森 赫子……………(10)

撫子の美しさ……………鈴木成元……………(20)

高僧伝 養鸕徹定……………大橋俊雄……………(8)

法然上人の感化……………村上博了……………(24)

新編百喻経③……………伊東挙位……………(39)

信仰相談…………………………(26)

石川啄木(2)……………須藤隆仙……………(12)

扉の御法語……………(10) かむことは長

童心仏心……………(40) 生きのもと……………(40) 19

釈尊の生涯(八)……………佐藤密雄……………(32)

浄土 四月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

ゴータマ・ブツダの誕生……………中村 元……………(2)

釈尊誕生と仏伝……………宮林昭彦……………(7)

西方浄土變と 阿弥陀三尊像……………北川桃雄……………(10)

素人平和論の罪……………木谷 昭……………(26)

身辺雑記④
日曜の夜……………森 赫子……………(16)

高僧伝 日野靈瑞……………大橋俊雄……………(24)

法然上人の感化……………村上博了……………(30)

新編百喻経④……………伊東挙位……………(15)

信仰相談…………………………(32)

石川啄木(3)……………須藤隆仙……………(18)

扉の御法語……………(22) 物と心と……………(9)

小さなシツケ……………(28) 会員だより……………(40)

仏教習俗覚書(1)……………中村康隆……………(34)

—花まつり その他—

浄土 五月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

議 論……………川崎敬一……………(2)

大原の夜……………高橋良和……………(6)

救 済……………木谷 昭……………(26)

「どうしん」と云うこと……………純誉翠風……………(14)

身辺雑記⑤
中年の美しさ……………森 赫子……………(12)

高僧伝 福田行誠……………大橋俊雄……………(10)

法然上人の感化……………村上博了……………(8)

新編百喻経⑤……………伊東挙位……………(31)

信仰相談…………………………(24)

石川啄木(4)……………須藤隆仙……………(16)

扉の御法語……………(21) 五月の歳時……………(22)

童心仏心……………(39) 日常語化した……………(23)

仏教習俗覚書(2)……………中村康康……………(32)

—練供養と団扇まき—

浄土 六月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

法然上人七百五十年御忌記念

「講演と映画のつどい」紙上特集

挨拶……………小林大蔵……………(3)

法然上人のお言葉……………佐藤密雄……………(6)

三余の業……………太田康雄……………(14)

身辺雑記⑥
他人のころ……………森 赫子……………(16)

高僧伝 笹本戒浄伝……………大橋俊雄……………(10)

法然上人の感化……………村上博了……………(12)

新篇百喻経⑥……………伊藤孝位……………(23)

信仰相談……………須藤隆仙……………(32)

石川啄木(5)……………須藤隆仙……………(18)

創作 世尊と阿闍世

——第一回——……………鶴田湛泉……………(24)

扉の御法語……………(16) 自然……………(22)

童心仏心……………(31) 会員だより……………(40)

仏教習俗覚書(3)……………中村康隆……………(34)

鞍馬の竹切り(竜蛇信仰と仏教)

浄土 七月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

法然上人七百五十年御忌記念

「講演と映画のつどい」紙上特集

宇宙人と仏教……………徳川夢声……………(2)

しつけということ……………新聞進一……………(13)

石川啄木(6)……………須藤隆仙……………(18)

高僧伝 萩原雲来……………大橋俊雄……………(16)

創作 世尊と阿闍世

——第二回——……………鶴田湛泉……………(34)

童心仏心……………(23)

信仰相談……………(32)

仏教習俗覚書(4)……………中村康隆……………(24)

——お盆月の行事——

浄土 八月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

聖者の非人情……………佐藤賢順……………(2)

善も悪も世のならい……………吉野翠幹……………(13)

末法万年のはじめなり……………石原有政……………(18)

新安保条約批准と

新聞の責任……………青砥 信……………(10)

高僧伝 久我誓円尼……………大橋俊雄……………(18)

法然上人の感化……………村上博了……………(14)

新編 百喻経(七)……………伊東孝位……………(25)

信仰相談……………(30)

扉の御法語……………(29) 因襲再考……………(24)

童心仏心……………(9) 故郷……………(13)

創作 世尊と阿闍世

——最終回——……………鶴田湛泉……………(32)

浄土 九月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

人生のゆくえ……………林 靈法……………(2)

——秋の彼岸に思う——

かわや念仏……………井川定慶……………(16)

入信の方便……………村上博了……………(12)

法然教学の基礎理念……………津村諦堂……………(6)

——選択の意義について——

高僧伝 山田弁承……………大橋俊雄……………(4)

法然上人の感化……………(20)

信仰相談……………(22)

扉の御法語……………(32) 新刊紹介……………(19)

童心仏心……………(5) 教学大会 開催日定……………(8)

仏教習俗覚書(五)……………中村康隆……………(24)

浄土 十月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

御十夜の教え……………林 隆碩……………(6)

薄地底下の人……………戸川靈俊……………(10)

青年と孝養……………(2)

合理的ということ……………藤金 正……………(24)

あさくさ風土記……………一瀬直行……………(16)

高僧伝 土川善激……………大橋俊雄……………(14)

重ねられたもの……………純 誉……………(9)

新編 百喻経(8)……………伊東挙位……………(19)

扉の御法語……………(12) 新刊紹介……………(26)

童心仏心……………(18) 教学大会 開催日定……………(32)

草木物語(1)……………合田微雪……………(20)

子供の怪我(上)……………村瀬秀雄……………(27)

浄土 十一・二月号 目次

悪人正機説の法然に於ける

思想的源流……………古田紹欽……………(2)

成道……………紀野一義……………(14)

人情噺と除夜の鐘……………吉田雅男……………(28)

爪連の六夜様……………鈴木成元……………(7)

日の丸……………(12)

身辺雑記……………村田嘉久子……………(20)

法然上人の感化……………村上博了……………(26)

新篇 百喻経(9)……………伊東挙位……………(32)

映画続「親鸞」を見て……………内山憲尚……………(18)

草木物語(2)……………合田微雪……………(23)

扉の御法語……………(30) 江戸時代の

童心仏心……………(19) 日本靈異記 浄土宗……………(6)

子供の怪我(下)……………村瀬秀雄……………(33)

三十五年度総目次一覧……………(37)

☆☆信仰の歩みを進めるために☆☆

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 竹中 信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二〇円一八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円一八円

側々と人の心を打つ失明の体験

森 赫子

文学の世界からみた無常の話

武田 泰淳

宗教の信仰の遺文にみる

佐藤 賢順

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二二八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

「浄土」の会員を一人でも多く

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円
(送料不要)

浄土 十一、二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年十一月廿五日 印刷

昭和三十五年十二月一日 発行

定価 五十円

編集人 村 瀬 秀 雄

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

大正大学教授 竹中 信常 著

宗教儀礼の研究

青山書院刊
A 本文 380 頁
B 本文 350 頁
定価 九百円

宗教は實際に生活の上に、実践されなければならない。著者はそれを儀礼の形で体系化した。そのいわんとするところは、信仰と儀礼の一致相即である。本書は著者が学位請求論文として提出したものをもととして成されたものであり、その内容は次の如くである。宗教宣布信仰実践、法式作法に関心ある方々にひろくおすすめる。内容 序説 宗教儀礼の意味

特価 800円
送料当方負担

第一編 儀礼の理論……儀礼学説、儀礼発生論、儀礼類型論、儀礼における否定と消極、儀礼変容論、呪術と儀礼
第二編 儀礼の様態……祈禱、死の儀礼、物忌と断食、血の儀礼、火の儀礼
結論 礼儀と信仰

ヤスパース著

大正大学講師
峰島 旭雄訳

仏陀と龍樹

理想社刊
B 本文 256 頁
定価 三三〇円

現代西洋の卓越せる哲学者ヤスパースが十年の歳月を費して公けにした論著。西洋哲学の立場から仏教を新しく評価解釈し、これをきわめて平易な言葉で敘述している。

東京都品川区上大崎一の七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響理 学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田